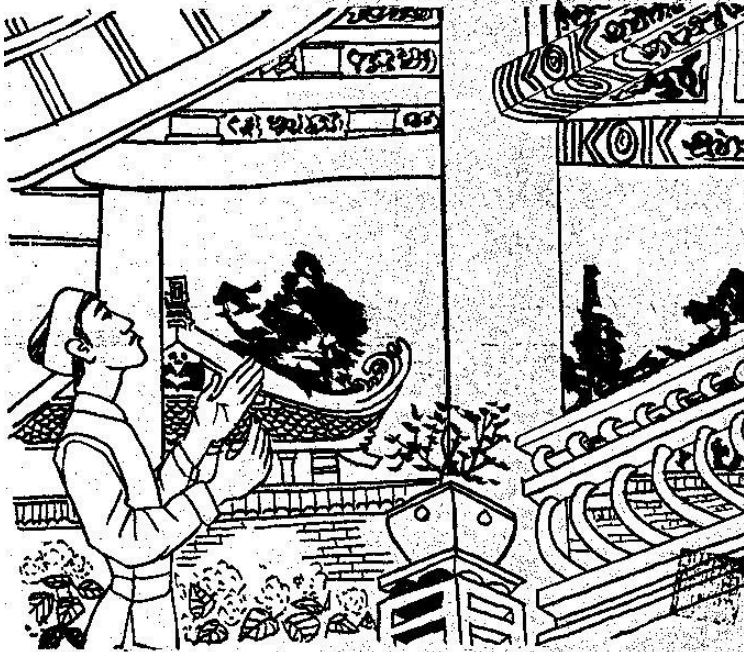


Truyện cổ Việt Nam tập I được dịch từ tiếng Việt sang Nhật ngữ và được xuất bản tại Tokyo vào ngày 15.1.1975

# ベトナムの民話

## 第一集



NGUYEN DONG CHI 編

LE CUONG 法名 THICH NHU DIEN 訳

ベトナムの民話

『第一集』

NGUYEN DONG CHI 編

レ・クオン 訳

## 序

レ・クオン君との最初の出会いの情景を、現在でも思い出します。

帝京大学では、留学生の第二外国語として日本語の講座を開いています。昭和四十九年四月、どこの国のどのような学生が受講にくるのかと、期待しながら研究室で待つていると、剃髪して僧侶の衣服を身にまとったレ・クオン君が、微笑を浮かべながら入って来ました。それで、何と無く「今日は。」と言って頭を下げたところ、レ・クオン君の顔色がさつと変わりました。「どうかしましたか。」と聞いたところ、「先生、ベトナムでは、頭を下げられるのは、軽蔑されたことになります。」との言葉を聞いて、一瞬あつげにとられると同時に「日本の国では……。」と弁明これ努めたことを覚えています。

一週間後の講義で部屋に入って来た時には、ここに笑顔を見せながら「先生、今日は。」と丁寧に頭を下げ、「郷に入つては郷に従え」ということわざもありますので。」という言葉が返ってきました。

ベトナムから一人でやって来て、日本との風俗・習慣の違いでいろいろ苦労したことと



思います。この違いは、文章についてもいえることですが、ベトナム語を日本語に翻訳するにあたり、日本語の主語の省略、助詞の使用法で途惑っていたようです。が「郷に入つては」の精神で、努力しながら自分のものにしていく態度には頭が下がります。

又、授業が終わつての雑談でこういうこともありました。「先生、自分は一生結婚しません。」というので、理由を聞いたところ「一人の女性を心から愛してしまつと、すべての一般の人々に愛を及ぼす気持ちが薄くなります。それに、現在のベトナムには、自分が心の支えになつてあげなければならない人達がたくさんいます。」

レ・クオン君は、敬虔なる仏教徒であり、レ・クオン君の心の中では、さらにベトナムでは、仏教が日常生活の中で生きていることを強く感じました。それ故に、レ・クオン君は、人間の生を断ち切る戦争を心から憎みました。いつも微笑を絶やさないレ・クオン君が、祖国について語る時、その顔は曇りました。

レ・クオン君は、現在、帝京大学文学部教育学科三年に在籍しています。

昭和五十年四月

帝京大学文学部国文学科助教

岡 田 啓 助

ベトナムの民話 第一集

目次

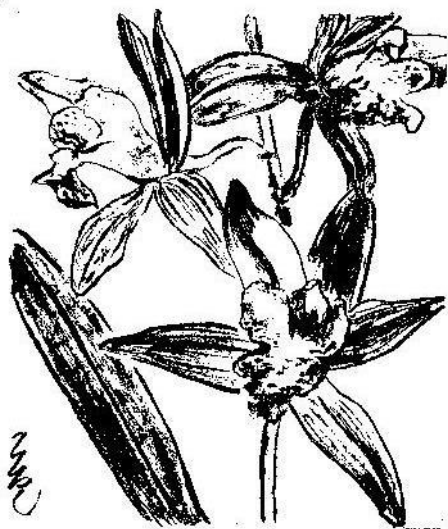
序	.....	岡田啓助	.....	二
第一部 物の起源				
西瓜の話	.....			七
血の木の伝説	.....			一四
きんま、びんろう樹と石灰石の話	.....			一七
からすとくじやくの話	.....			二三
蟹の話	.....			二六
雷鳥の話	.....			三七
うそ鳴き声の鳥の話	.....			四二
蛙の話	.....			四八

うそ鳴き声の鳥の話	四二
蛙の話	四八

かぶとがにの話	五二
お正月の旗さおの話	五五

第二部 地名の起源

石が夫を待っていた	六一
五大山の話	六六
剣の池の話	七二
一夜の池と自然の砂丘の話	七七
海の池の話	八八
ロイ城の話	九三
あとがき	一〇〇



才  
一  
部

物  
の  
起  
源



## 西瓜の話

昔、遠い南海のある国にひとりの青年がいた。その人の名前はマイ・アン・チインムと  
いつた。彼は奴隸として売られた。船頭たちが彼を雄王に売ったのである。マイ・アン・  
チインムはベトナム語がよく話せし、日常生活においても豊富な知識をもっていた。品  
物を取り引きする才能も持っていた。王様は彼をとて愛されたので、彼はいつも王様の  
そばを離れなかつた。三十五才の時、彼は侍従武官になつた。彼の家は王様の宮殿のそば  
にあつた。王様はマイ・アン・チインムに養女を嫁として与えた。その年、彼女は男の子  
を産んだ。マイ・アン・チインムの家来にはいろいろな人がいた。家の中にはいつも珍し  
い食べ物やおいしい物がたくさんあつた。彼は強大な権力を持つていながつたが、人々か  
らとても尊敬されていた。陳情の人達も彼の家を訪れるようになった。マイ・アン・チイ  
ンムの身分が高くなるにつれて、それを恨み、ねたむ人たちも少なくなかつた。

ある日、お客さんを宴会に招待すると、みんなは自分のことを誇らしげに自慢した。し  
かし、マイ・アン・チインムはいつも謙虚な気持をもつていたので、「自分には、自慢す

ることは何もない。この家の、すべての品物は先代の物である。」とごく自然に言った。国の宗教が、彼にそう教えたのであった。すべての喜びや苦しみは、前世の良い行いや悪い行いの因縁であるという意味であった。王様の側近の二、三人の家来は、マイ・アン・チインムを前から良く思つていなかった。それで、彼の話がひどい自慢話に聞こえた。家来たちは王様にこのことを申し上げた。

雄王は、そのことを聞いて、気分を害した。

「こら、ばか者め！ マイ・アン・チインム、今日、お前はそのような自慢話をしたのか。明日は、どのような無礼な話をするつもりなのか。お前は嘘つきの奴隷である。家来たちよ！ 彼を投獄せよ。」と大声で言った。

夕方、マイ・アン・チインムは暗い牢に入れられた。その時、彼は自分の言つたことが間違いであつたと、考え直した。

「これからここで虐待されるとしても、それは前世で悪いことをやつた報いなのだ。」と思つた。宮殿では、家来たちが集まつて、マイ・アン・チインムに判決を下そうとしていた。大勢の家来は、彼を死刑にすることを申し出た。彼の足を切ることを申し出た家来もいた。その時、老いた家来がいてねいに王様に言つた。王様はその話に耳をかたむけた。

「死刑の罪が適當ですが、死ぬ前に、彼の物はすべて陛下と天と海のおかげで、決して先代の物ではないことを認めさせるべきです。そして、二か月の食糧を持たせて、峨山の門の前にある小さな島に行かせ、『この家のすべての物は私の先代の物である。』と言う考え方を、反省させなければならぬ。」と言った。

雄王は、その話にうなづいた。そして「彼に食糧を三か月ぐらい持たせろ。」と命令した。追放の日、妻は子供を背負つて夫と一緒に行くとした、それを見て、回りの人々は「気が狂つたか。」と思ひ、彼女を思ひとどまらせようとした。しかし彼は「象がいれば草がある。」と言つて妻や子と連れ立つて出発した。

しかし、島に着いてみると、そこは暗く、荒れはてていた。妻は夫の肩にもたれて、「私たちここで死ぬのね!」と悲しそりに言つた。

マイ・アン・チインムは、子供をおんぶしながら妻に言つた。

「お天とう様はいつも見ているよ! もつとがんばろう! こわがらないで。」

一か月が過ぎた。島での生活は安定してきた。ほら穴を家とした。水は泉からくんできた。塩は海水からとつた。しかし、これからの長い生活の事を考えると、手持ちの食糧では足りなかつた。

「我々に果物の種があれば、心配することはないんだがなあ。」と言った。

ある日、突然、鳥の群が、島の西側から飛んで来た。それから、砂丘に舞いおりて、五六粒の種を吐き出した。しばらくすると、種は芽を出し青い葉をつけ、人間の頭ぐらゐの青い実がたくさんなつた。マイ・アン・チインムがその実の一つをとって切ってみると、中は赤く、種は黒かつた。夫婦と子供が一緒に食べてみると、あまくてすばらしい味だつた。マイ・アン・チインムは、うれしそうに言つた。

「ああ、これは今までに見たことがない珍しいメロンだ。これを西瓜と呼ぼう。というのは、このメロンは鳥の群が西からもつて来て、我々に与えてくれたものだから。これからは、生活が楽になる。」と言つた。

夫婦は、ある時、航路を間違えた漁船を見つけた。夫婦は、帆船を直して、大陸へ帰ることができるようになつてあげた。別れの時、彼等に西瓜をあげた。「西瓜がどういふものか、まだ知らない人々に、紹介して下さい。」と言つた。

さらに、夫婦は「西瓜をあげるかわりに、お米を運んで来て下さい。」と頼んだ。その後、船はマイ・アン・チインムのところへ、お米をたくさん持つて来た。夫婦は、お米を受け取ると、帰りの船で西瓜を運ばせた。夫婦と彼等はともに希望どうりの物物交換がで

きた。

その後、一家の食事は、だいぶ変わった。白い御飯のかまのそばに坐つて食事ができるよつになつた。マイ・アン・チインムは、小さな声で息子に「お天とう様のおかげで、我々はこんな良い生活をする事ができるんだよ。」と言つた。

それからほもつとたくさんの西瓜を植えた。漁船やつり舟なども、しばしば島へ来るよつになつた。ほかのいろいろ違つた種類の種も手にはいるよつになつた。西瓜と交換した船頭たちは、マイ・アン・チインムに、

「私たちの地方の人々は、みんなこの西瓜を食べたがつています。いくらでもお米を持つてきますから、西瓜をどんどん作つて下さい。」と言つてよく買つた。夫婦は種をたくさん植えた。二、三年で、西瓜が畑いっぱいになつた。マイ・アン・チインム夫婦の名前は、次第に有名になつた。人々から「西瓜の親」と言われた。

さて、一方、ある日、王様は「ばかな家来が、つまらない邸を建てた。もし、マイ・アン・チインムがいれば、こんな家にはならなかつただろう。」と残念に思つた。その日は何回も何回も彼の名前を口にした。家来たちに「マイ・アン・チインムは、今はどこにいるのか。」と尋ねられた。家来たちは「亡くなつたようです。」と答えた。

しかし、王様には信じられなかった。ほかの奴隷に「マイ・アン・チインムを捜せ。」と命令した。奴隷は、愛州という地で、マイ・アン・チインムを見付けた。

一か月後、彼は船にいつばい西瓜を積んで、王様のところに帰つて来た。マイ・アン・チインム夫婦は、「陛下に差し上げて下さい。」と言つてさし出した。「私達には大変苦しい生活がかつてはありましたが、現在では楽な暮らしをしています。」と申し上げたところ、家来は王様に、

「現在、マイ・アン・チインムの夫婦は、島にきれいな家を持っています。使用人も百人以上います。西瓜も、青い稲の畑も、ぶたも、にわ鳥もいつばいもっています。」と申し上げた。

雄王はびっくりした。昔、マイ・アン・チインムの悪口をいつた家来たちに、

「彼は、自分自身の物は前世の物と言つたが、本当のことだ。間違いないよ。」と教えた。王様は大勢の家来に彼を迎えに行くよう命令した。マイ・アン・チインムは昔より高い身分で迎えられ、二人の美人がマイ・アン・チインムを慰めた。

人々は、その島をマイ・アン・チインム島と呼んでいる。マイ・アン・チインムの行なつた仕事は、大勢の人々によつて引き継がれている。島には小さな村ができた。マイ・ア

ン・チインムと言う村であつた。夫婦の古い屋敷は神殿になり、島の人々は「西瓜の祖父・祖母」と呼んだ。

## 血の木の伝説

昔々、あるところに屠殺人がいた。彼はいつも豚を買つて殺し、それを市場へもつて行って売つていた。彼の家は村の寺のそばにあつた。そのお寺の僧は、毎朝早く起きてお経を読み、小僧には鐘をつかせた。

その鐘を聞くと、屠殺人は起き出して、豚を殺し始めた。

ある晩、僧は夢を見た。五人の親子がお寺に入つて来て突然「助けて下さい。助けて下さい。」と言つた。僧はその母親に、「阿彌陀仏。助けてほしいとはどういうことですか。そして私はどうしたらいいんですか。」と尋ねた。彼女は「あしたの朝は、鐘をおそくついて下さいませんか。そうしていただければ、大変ありがたいのですが。」と頼んだ。

次の朝、夢で頼まれた事を実行するため、僧は、お経を読んだだけで、鐘をつかせなかつた。

遅く目覚めました屠殺人は、豚を殺しても、市場が閉まつているので、その朝の仕事

しなかつた。それから鐘をつかせなかつた僧を憎んだ。顔を真赤にして怒り、お寺に入つて行つた。僧は、ゆうべの夢の話を説明しながら、自分の罪ではないと答えた。

屠殺人が家へ帰ると、朝殺すはずだった豚が、五匹の子豚を産んでいた。彼はびつくりすると同時に喜んだが、こわい気持にもなつた。

彼は、この不思議なことをほかの人にも話した。「間違いない！ その豚は、僧の夢の中に出てきた主婦の化身だよ。」と言つた。

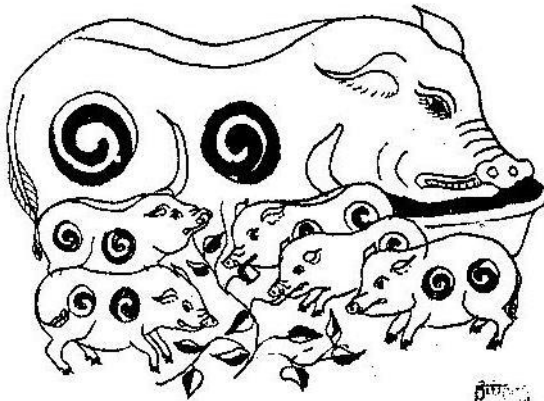
屠殺人は色々なことを考え、「昔から今までずいぶんたくさんさんの生命を殺

### 普明寺



した。この罪悪がどんなことになるのか……。」と心から反省した。彼は豚を殺すナイフを、お寺に持って行き、「ごんげしたい。」と僧に申し出た。それから罪深いナイフを、境内の土に刺し、仏前に坐つて「もうこれから豚を殺しません。」と誓った。

それ以後、心安らかな生活を送ることができた。しかし、ナイフは、珍しい木に変化した。その木の葉の色は、血の色に似ているので、人々はその木を「血の木」と呼んだ。



豚 国民画

## きんま、びんろう樹と石灰石の話

昔ある家に二人の兄弟がいた。兄の名前はタン、弟の名前はランと呼んだ。兄弟は、家族でも間違ひほど、うりふたつであつた。父は、その地方でも一番体の大きな人であつた。雄王はいつも彼等の父をほめた。王様は父にコウという名を与えた。それから、家族はコウという姓を使つた。

両親は二人が小さい時に、続いてなくなつた。二人の兄弟は仲よく暮らした。父親がなくなる前にタンは、道士ルウ氏の目に止まり、ルウ氏の家へ勉強に行くことになつた。弟のランは一人で残されることにはとても耐えられなかつた。どうしても兄と一緒に勉強しなかつたのでついで行つた。ルウ氏の家には彼等と同じ年ごろの娘が一人いた。彼女は、兄弟のどちらが兄で、どちらが弟か、はつきり知りたかつた。ある日、娘は、その方法を考へた。食事の時、娘は彼等に一人分のはしと、御飯を渡して、壁のうしろに立つて様子を見まもつていた。ランが、タンに御飯を渡したのを見て、彼女は「ああ、先に御飯を食べたタンが兄だ。」と思つた。

それ以後、娘とタンは逢い引きするようになった。二人の愛情はしだいに深いものとなつていった。ルウ氏の道士は大変喜んで、彼女とタンの結婚式をあげた。結婚してから夫婦は、新しい家に住んだ。そして、ランも、二人と一緒に住んだ。結婚してからのタンは弟にだんだん冷淡になつた。昔のようなやさしい兄ではなくなつた。小さい時、両親を失つたランにとつて、兄は、父であり、母でもあり、ランのすべてであつた。ランは毎日毎日孤独におちこむようになった。そのため、ランの心はタンからだんだん離れていった。

「きつと、兄は妻を愛するあまり、自分を忘れているのだ。」ランは大変悲しくなつた。ある日、ランはタンと一緒に山へ行つた。二人とも、なかなか帰らなかつたが、ランの方が先に帰つて来た。タンの妻は、ランにキスをした。ランは大きい声で叫んだ。兄嫁の間違ひとはいへ、二人はとても恥ずかしかつた。しばらくしてタンも家に帰つて来た。

その時から、ランは、兄の自分に対する感情がだんだん変つていくのを感じた。タンは弟に対して警戒心が強くなり、そのためになおさら弟に冷たくあつた。ランは兄に怒りを感じ、そこにいるのがつらくなり、とうとう家を出ようと決心した。ある朝早く、ランは家を出た。坂道を登りながら、兄を憎んだ。

来る日も来る日も歩き続けた。ランはきれいな水がゆつたりと流れている、大きな川の

そばに着いた。ランの回りには鳥の声すらなく、一人ぼっちで不安になった。しかし、家へはもどりたくなかった。ランは、川の岸に坐つて泣いた。何日も何日も、そのまま坐つて泣き続けた。その姿はいつのまにか、石灰石になつてしまつた。

家では、いくら待つても、ランが帰つて来ないので、タンは心配しはじめた。そしてタンは親切な家々で、ランの事を尋ねたが、消息はぜんぜんわからなかつた。

「弟はおれにおこられたと思つて家を出たのだな。」とタンは反省した。それから妻を家に置いて弟を捜しに行つた。幾日か歩き続けて、彼は大きな川に着いた。川を渡ろうと思つても、船も橋もないので、石のそばに立つて、いなくなつた弟のことを思い涙を流した。そのうち、タンの体はびんろう樹になつてしまつた。

タンの妻は、いくら待つても、夫が帰らないので、家を出て、捜しに行つた。

最後には、彼女も大きな川のそばに着いた。それから、木のそばに坐り、涙がかれるほど泣いて、死んだ。彼女はきんまの木に変わつてしまつた。そのきんまの木は、びんろう樹にまきつきながら伸びていつた。

道士の夫婦も、三人の帰りを待つていたが、三人が姿を見せなかつたのでその大きな川の岸まで捜しに来た。その石灰石と樹を見て、大変感心して、そこにお宮を建てた。

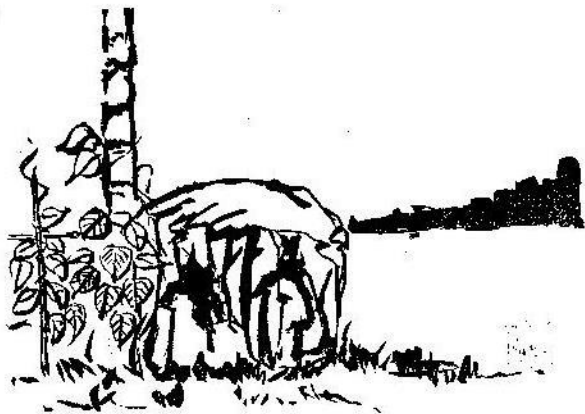
その地方の人々は、その三人を「兄弟和合、夫婦節義」の鑑として尊敬した。

ある年、日照りが続き、すべての草は枯れてしまった。しかし、石のそばのきんまの木とびんろう樹は、大変美しく茂っていた。人々はそれを見て、珍しいと思つた。

ある日、雄王は、この地方に立ち寄つた。お宮の前の珍しい木と、風景にびつくりされた。「このお宮はどんな神様を祭っているのか。……こんな珍しい木は、まだ見たことがない。」と言われた。部落の長は、その地方の一番の年寄りを呼んできて答えさせた。



雄王は、びんろう樹の上へのぼって、回りの景色を眺められ、実を一つとつて食べてみた。それだけ食べると、ちよつと苦い味がしたが、きんまの葉と一緒に食べると、とても珍味であった。からくておいしかった。突然ある家来は「南無三宝ノ 血だノ 血だノ」と言った。人々はびつくりした。きんまの葉とびんろう樹の実を食べると、汁が出て来た。その汁を、石灰石の上に出すと、血の色に似ていたので吐き出すと、血の色に似ていたのであった。王様は「三つのものを一緒に食べなさい。」と命令された。家来たちが、食べてみるとくちびるが赤くなり、顔色も良くなった。



王様は「珍しい物だ。彼等の愛情はとてすばらしいものである。その愛情は、いつまでも赤く変らないのだ。」と言った。

それから王様は、人々にそれらの木を植えるようにと命令した。とくに結婚式の際には、きんまの葉と、びんろう樹の実と石灰石は必ず用意しておかなければならない。そして、愛情をなくさないよう、それらを食べなければならぬということ、法律で決めた。それ以後、ベトナム民族は、きんまの葉を食べるのが慣習になった。



## からすとくじやくの話

昔、一羽のからすとくじやくがいた。たいへん親しい友達であった。二羽とも、今のよ  
うな羽の色とは違つて、ねずみ色であつた。くじやくは、体の割りに頭が小さくて、首が  
長く、とても醜くかつた。くじやくはからすに比べると、あまり格好が良くなかつた。

ある日、からすはくじやくに、

「向こうにあるペンキ屋さんには、いろいろな色のペンキがあるよ。そこに行つてペ  
ンキを盗みましよう。そして羽に色を塗りましよう。」と言つた。

くじやくは賛成した。その日、ペンキ屋は、絵を書くのを途中でやめ、ペンキをそこに  
置いたまま、昼寝をしていた。そのすきに彼等は筆とペンキを途中でやめ、小さい丘の方へ持  
つて行つた。一回目は盗むことができたが、二度目はできなかつた。ペンキ屋さんが起き  
ていたので、からすもくじやくも、がっかりした。からすとくじやくが一緒に盗んできた  
ものは、一本の筆と黒と青色のペンキだけだつた。

からすは「よし、これで絵を描こう。」と言つた。そして、くじやくに横になれと命

令した。からすは、大変上手にくじゃくの羽を塗り、青味がかつた色になった。尾のどが一番すばらしいところになった。

からすは描き終つて、大変満足した。くじゃくが立つて、羽を広げると、青とねずみ色のしま模様はともきれいだつた。

次に、くじゃくがからすの羽に描く段になつたが、あまりよく塗れなかつたので大変心配した。しかも、青色のペンキはもうなくなつていた。その時、突然どこからか、ほかのからすの群が飛んで来た。

くじゃくが、からすの羽に色を塗っているのを見て、からすの群が話しかけた。

「からす君、お前は何をやっているの。東の方へ早く飛んで行こうよ。」と言つた。

「どうして。」

「東の方には、先ほど人間が殺し合ひをして、死体がいっぱいあつたよ。」と言つた。

「ありがたい。」からすは人間の肉と聞くと、すぐにも食べに行きたかつたが、応ずることができなかつた。それで、からすの群に頼んだ。

「そうですか。しかしゆつくりして下さい。くじゃくがまだ塗り終らないんだ。もうすこし待ってくれ。」

「だめだよ、夕方までに行かないと。明日になると、死体がなくなるよ、」と言った。  
からすはくじゃくに命令した。

「大急ぎだ、」

くじゃくは、大急ぎで、からすの体全部に黒色を塗った。黒色のペンキをからすの体にさあつと浴びせてしまった。さあたはいへん、真黒になつてしまった。ついでに、くじゃくは、からすのくちばしも足も、真黒にした。からすの体は炭のようであつた。

自分の体を見て、からすはくじゃくを憎んだ。しかし、これも自分が急いだためだから仕方がない。からすは悲しく思つた。からすはくじゃくに文句をいながら飛んで行つた。それ以後、くじゃくとからすは、仲が悪くなつた。

このようなわけで、今でも、くじゃくの羽はすばらしい。どこへ行つても、くじゃくはきれいな羽と尾を見せびらかしている。しかし、からすは、どこでくじゃくと会つても、大きな声でののしるようになった。

## 蟹の話

ある年寄りの夫婦がいた。彼らの名前は、夫婦ともにジア・テアンと<sup>(1)</sup>呼ばれていた。庭には、大きなへびの穴があった。

おじいさんは、へびの夫婦が、その穴に出はいりするのをよく見かけた。

ある日、夫のへびは、一人で穴を出た。おじいさんは、その穴の奥をのぞいてみた。中には妻のへびが横になっていた。妻のへびは、皮を取り替えたばかりなので、どこへも行けなかった。

しばらくして、夫のへびがもどつて来た。口にくわえた小さな蛙を妻に与えた。

二、三か月後、ジア・テアンは、妻のへびが一人で穴を出るのを見た。今度は、夫のへびが皮を取り替えているのであった。古い皮は穴のそばにあった。しばらくして、妻のへびが帰つて来た。妻のへびの後には、大きな雄へびがついていた。おじいさんは、二匹が一緒になって、穴のそばでとぐろを巻いているのを見た。それから雄へびは穴の中に入つて行こうとした。

おじいさんは、この雄へびが何をやるのか知っていた。突然、おじいさんは、あの雄へびがきらいになった。皮を取り替えた蛇をかわいそうに感じ、あの雄へびを殺したいと思つた。

そして、おじいさんは、雄へびを弓で射た。偶然にも、矢は妻のへびの頭にあたつた。妻のへびは死んだ。雄へびはびつくりして、急いで逃げていった。おじいさんは、妻のへびを気の毒に思つた。しかし、気の毒に思うと同時に、憎む気持ちもあつた。

おじいさんは家へもどつた。それからおじいさんはへびの穴を見なかつた。

一週間が過ぎた。ある日、おじいさんは、へびの夫婦の話をおばあさんにした。色々なことを見たこととか、矢を放つたことをおばあさんに話した。おじいさんが話し終ると、屋根の上で音がした。二人ともびつくりした。屋根を見ると大きなへびがいた。へびの尾は屋根の上にある、頭はおじいさんのところまで長くたれていた。へびは口から玉を吐いた。おじいさんが、それを受け取るとへびが言つた。

「おじいさんは私の恩人で、敵ではなかつたね、二、三日、私はずっとおじいさんの家の屋根に坐つていた。今おじいさんから聞いた話で、私が間違つていたことがわかつた。音を聞く玉をおじいさんに差し上げます。この玉を体につけておくと、すべての動物の話

がわかります。」

おじいさんは、びっくりしながらも喜んだ。そして、玉を受け取った。それから、どんなことがあっても、その玉を体から離さなかった。

X X X X X X

ある日、ジア・テアンが野菜を取っていると、どこからか、からすの群が飛んで来た。からすたちの話をおじいさんは聞いた。からすの群は、おじいさんに、

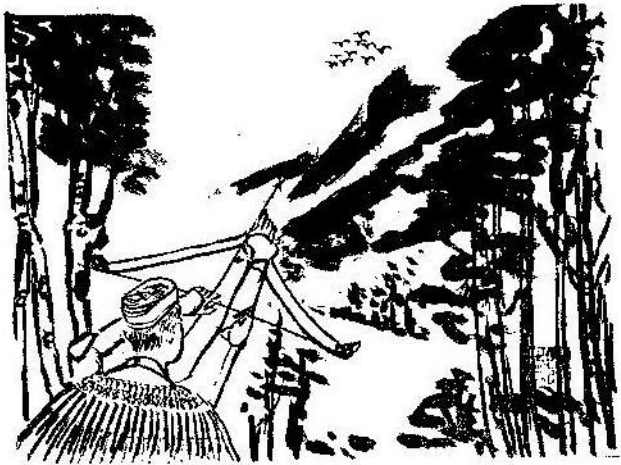
「南の山の牛がとらに殺された。そこに行つて、肉を持って来てもいいですが、内臓は残しておいて下さい。」と頼んだ。ジア・テアンは、そこに行つて、牛肉を持ち帰った。家に着いて近所の親切な人々にも話した。しかし、内臓は向こうに残しておいて下さいという、からすの話を忘れてしまつていた。近所の人々も、大勢来たので、肉も、内臓も全部持ち帰つたのである。

からすたちは、牛の内臓がなくなつていたので、ジア・テアンを悪者であると思つた。ジア・テアンの庭に飛んで来て、内臓の事を言つた。ジア・テアンはからすたちの信用をなくした。いくら説明しても、からすたちはおじいさんの言うことを、信じようとはしなかつた。庭に立つて、ののしつた。

我慢できなくなつたおじいさんは、矢を取つてからすたちを射た。おじいさんの目的は、からすたちを追つばらうことで、殺すことではなかつた。しかし、からすたちには、理解できなかつた。その矢には、ジア・テアンという名前が書いてあつた。

からすたちは、その矢を持つて、復しゆうするつもりであつた。

川の上を飛んでみると、死体が流れているのが見えた。からすたちは、矢を死体ののどに刺した。ちようどそこに、その地方の代官がやつて来た。矢に、ジア・テアンの名前が書いてあつたので、家来に向つて、彼を捕えて牢



に入れるようにと命令した。

ジア・テアンは、突然捕えられたので、大変な誤解であると弁明した。しかし、矢がジア・テアンのものであったので、信用してもらえなかつた。そして、牢に入れられることが決まつた。ジア・テアンは、代官にもう一度調べて下さいと頼んだ。代官は、事情がはっきりしないので、彼を王様のところに送ることにした。

王様のところに行く途中で、休憩があつた。夜になると、道のそばの店に留まり、食事をした。ジア・テアンは囚人になつたので、少しの自由もなかつた。体が痛くて、寝ることもできなかつた。夜が明けはじめると、すずめの群が飛んで来て、頭の上で、

「早くしろ！ これから食糧を盗みに行くが、誰にもおこられないよ！ これからは飢えの心配をしなくてもいいよ！」話していた。

一羽のすずめが「その食糧は、誰のものですか。」と聞いた。ほかのすずめが「他国の王様の物だよ！ ほかの国の兵隊たちが、この国の兵士を殺して来たが、途中で食糧の馬車が穴にはまつて出られなくなつたのです。彼らは国へ引きかえして、改めて食糧を持ってくるんだよ！ 早く食べに行こうよ！」と答えた。

ジア・テアンは、その話を聞いて、家来たちに、

「申し上げることがあります。私が牢に入ることは大したことでありませんが、國家の重大事がありますので、大急ぎで国を守る準備をして下さい。」と言った。

家来たちがそれはどういふことなのかと、いくら聞いても、シア・テアンは何も話さないで、ただ「代官がいらつしやったら、はつきり申し上げます。」と言った。

シア・テアンは代官に会うと「北の国のヒエン・デエという王様が、家来たちに南國へ侵略しろと命令したというのを聞きました。現在、敵軍は、わが国の領土に入ろうとしているが、食糧を積んでいる馬車が穴に落ち込んで進めなくなつてしまつた。それで攻撃することができないわけです。」と伝えた。

代官は驚いてシア・テアンにもう一度確かめた。すると「私の言うことが違つていたら、首を切つて下さい。」と誓つて言つた。代官は「あなたの言うことが真実だつたら、王様に頼んで、あなたを自由にしてやろう。」と言つた。

さつそく、王様の軍隊は、全国へ敵の情報収集に行つた。その日から、シア・テアンは自由になつた。シア・テアンの言うことが実際に當つたのである。敵が攻撃する前に、準備する時間が出てきた。自由になつたシア・テアンは、故郷へ帰ることにした。何日たつても自分の古家が見えないので、途中で友達の家によつた。

昔の友達と会った。夫婦で喜んでくれた。

ジア・テアンから色々なことを聞いた。夫婦は感心した。

ジア・テアンが突然来たので、食事の準備をしていなかった。

「せつなくなつかしい友達が来てくれたのに、家には食べものがなにもない。さいわい、二羽の鳥がいるから一羽を殺して、友達に食事を差し上げて下さい。」と夫が妻に言った。妻は賛成して「明朝、一緒に鳥を殺して下さい。」と頼んだ。

夫婦が話していると、二羽の鳥の音が聞こえた。夫の鳥が「妻よ、子供を育てなさい。おれは殺されてもいい。」と言ったが、妻の鳥も「あなたのかわりに死にたい。」と頼んだ。

しかし、夫の鳥は「どうしても私が死ぬ。」と言って聞かなかった。

お父さんが鳥は、子供たちに別れの言葉を残して出かけた。しかし、お母さんが鳥は、夫の後ろからついて来て、どうしても、夫の代わりに死にたいと言った。

夫婦の鳥の話聞いたジア・テアンは、自分のために殺されると思うと、かわいそうでならなかった。

ジア・テアンは、夫婦にこの話をしようとしたが、理解してもらえないと思

つてやめた。友達が、が鳥のところに来たら、殺すのをやめさせようと考えた。

その夜、ジア・テアンは、大変疲れていたのに、どうしても寝つかれなかった。

友達は、朝の五時ごろ起きて、が鳥のところへやって来た。夫のが鳥は、妻のが鳥を速くに連れて行き、自分は主人のところへ走つて来た。友達が、が鳥を殺そうとした時、ジア・テアンは持つていたナイフを取り上げた。

それから「私のために、そのが鳥を放して下さい。殺すのを見るのがこわい。あなたが、そのが鳥を殺したら、私は今すぐ家へ帰りますよ。」と言つた。

ジア・テアンが、きつい言葉で言うので、友達はが鳥を放した。そして妻に「代わりにえびを買つて、友達に食べさせて下さい。」と言つた。

御馳走になつてから、夫婦に別れの挨拶をして、家を出た。帰る途中に先ほどのが鳥があらわれた。

夫婦のが鳥と子供たちは、ジア・テアンが来るのを池のそばで待つていたのでした。夫のが鳥は、ジア・テアンに玉を差し上げて「どうもありがとうございます。あなたに助けていただかなかつたら、私はもう死んでいたのでしよう。本当に、あなたは私の恩人です。そのお返しとして、この玉を差し上げます。玉を膚身はなさず持つていると、水中でも地

上でも、早く走ることができません。そして、この玉が、川の底に刺さると魚の玉様が出て来ますよ！」と言った。さらに「えびも私たちの恩人ですので、これからは、えびも食べません。」と誓って言った。ジア・テアンは、玉を受け取り喜んだ。

ジア・テアンは、川岸に着いた。玉の効果は、果たして、が鳥が言ったとおりなのか、ためしてみるつもりであった。そして衣服を着たまま、水の中に入って行つた。すると自然に水が二分され、川底まで歩いて行けた。川底のいろいろな景色も見ることができた。

その日、水宮で龍王と代官との会議があつた。突然、宮殿が何かで持ち上げられ、ガタガタと音をたててこわれた。どういふ原因でこうなつたのか、誰にもわからなかつた。

龍王は代官に、原因を調べるよう命令した。

龍王の代官たちが、激しい高波の原因について調査しているうちに、ジア・テアンを見つけた。ジア・テアンが、玉を水中に刺すと、水宮の人々は頭が痛くなつた。ジア・テアンが、犯人だとわかっているにもかかわらず、代官たちは何の手を打つこともできなかつた。それで、ジア・テアンに水宮に来て下さるよう誘つた。

龍王に会つて、ジア・テアンは「強くやってみたのではないのです。ほんのちよつと、ためしただけなのです。」と言つた。

龍王と代官たちは、その言葉聞いて、顔色が青くなつた。彼が本気でやつたら、この水宮はめっちゃめっちゃになるだろう。それで、シア・テアンに感謝した。シア・テアンが帰途につく時、龍王は珍しい財宝を贈つた。

シア・テアンが、水宮を出て家に着くまで龍王の代官たちは送つて来た。人々は、シア・テアンがお金持ちになつたことを喜んでくれた。その後、シア・テアンは二つの玉を大事にした。彼は、二つの玉を袋に入れて、首に掛けていた。

X  
X  
X  
X  
X  
X

ある日、シア・テアンは友達に用事があり、半日ぐらい歩いてやつて来た。友達の家へ着いてから、首のところを見てびっくりした。急いだために、玉の袋を忘れてしまつた。シア・テアンは、玉の袋がどうなつたか心配でならなかつた。友達の家の人々は、シア・テアンの心配顔を見て「まだ来たばかりなのに、どうして早く帰りがつているのかな。」と不思議に思つた。

家へ帰つて捜したが、玉の袋はどうしても見つからなかつた。シア・テアンは、がっかりしてしまつた。妻に尋ねてみようとしたが、姿はなかつた。ほうほう妻を捜したけれど見つからなかつた。最後にシア・テアンは小さな紙切れを発見した。紙には、妻の字で

「龍王が、この玉を水宮に持つて来た人を、誰でも皇后にすると云っているの、私はそのれを持つて行きます。私を捜さないで下さい。」と書いてあつた。

妻の手紙を読んでから、ジア・テアンは心配でたまらなくなつた。妻が、玉を持つて水宮に行つたなどと、信じたくなかつた。龍王についても、悪い人だとは考えられなかつた。

二つの玉のことを考えると、氣違いになりそうであつた。その後、ジア・テアンは、海に砂を入れて、道を作ろうと思つた。道があれば、水宮まで玉を取りに行けると思つた。

人々は思いとどまらせようとしたが、ジア・テアンの家が海のそばにあつたので、毎日同じように海に砂をかぶせていた。

死ぬまで砂を運び、海にかぶせることをやめなかつた。彼は死んでも蟹になつて、毎日毎日、海に砂をかぶせるのであつた。

ベトナムに俗謡があつた。

蟹は、東支那の砂を運ぶ、

でも、運んでも運んでも運びきれない。

(1) ジア・テアンというのは蟹の名前である。というベトナム語

## 雷鳥の話

昔々、あるところに一人の子供が母親と一緒に住んでいた。その子供は父親を早く亡くした。母親は葬式後二、三か月ぐらいで再婚した。父親側には親切な人がいなかったため、子供は母親と一緒に義理の父の家へついて行ったが、その父という人はとても冷たい人であった。

親子を用人人のようにしか思っていないなかった。義理の父が一番嫌っていたのは、その子供であった。時たま、義理の父の嫌いなことをやると、その子供をおこった。

彼の家の中には何にもなかった。仕事は山林へ行つて木を切ることであった。母親は結婚後、一、三日もすると、もう町へ木材を売りに行かなければならなかった。

不幸なことが起こった。その年はひどい不作であった。食べ物も着る物もなかなか手に入らないので生活が苦しかった。しかも、木材はとても安かった。昔は木材を二売ると一家は生活していくことができたが、今は朝食をとるにも足りなかった。その上、仕事のできない子供がいるので義理の父は大変嫌った。

「この子はむだめしを食べて生きているのだ。お前のためにおれたちは生活が苦しいのだ。」と言って子供につらく当たった。

妻に「子供を外の人に売れ。」と命じた。しかし、母親にはそんなことはどうしてもできなかつた。親子は死んでも別れたくなかつた。

義理の父は、子供を殺す計画を立てた。

ある日、母親が市場へ行つた留守に、彼は子供を遠い林に連れ出した。それから「お前は、この木の上に登つて、ちようちようを取らないか。いっばい取りなさいね。」と言つた。

子供は大変喜んだ。林の様子がめずらしいので、疲れることも忘れて駆けまわつた。

それを見て、義理の父は、子供を一層深い林に連れて行つた。木の实のあるところにやつて来た時、「実がいっぱいあるよ、そして木の下に御飯を置いとくからね。しばらく待つていなさい。すぐに戻るからね。」と言って、子供を置き去りにした。それから黙つて外のところへ木材を取りに行つた。義理の父は、その日の夕方家へ帰つてびっくりした。子供は、先に家に帰つて来ていたのである。

林の中で偶然にも、ある農民の一団と会つたので、一緒に家に帰つてきたのだつた。木

の下に御飯が置いてあつたので、それを食べてまだまだ元氣一杯だつた。

義理の父は子供からその話を聞いて、心の中ではますます憎んだ。彼は冗談のように格好をつけながら、

「お前のために、おれはどんなに林の中を捜したことか。どうしても見付からなかつたんだよ。」と言つた。

義理の父は、再びいい機会を見付け、もう一度子供を林へ連れて行き、うまく置き去りにした。前よりかもっと深い林の中に連れていつたのだつた。そこは誰も入ることができない所であつた。

彼は子供と別れる時に、「どう猛な動物に食ひ殺されるか、そうでなければ道に迷つて死ぬかのどちらかである。万一道に迷つて死ななかつたとしても、飢えのために死ぬだろう。」と考えた。

子供は夕方まで待つたが、義理の父は迎えには来なかつた。助けを求めながら泣いていた。しかし、山林の中からは何の返事もなかつた。子供はあちらこちらと捜しまわつたが、誰にも会うことはできなかつた。おなかがすいてもまだ助けを求めた。やつと御飯の置いてあるところを見つけたが、それは砂ばかりであつた。その上に御飯が少しのつていたが

下は砂であつた。子供は御飯を取つて食べた。

最後には、子供は砂のおわんを持つて、あちらこちらと走りながら大きい声で言った。

「お父さん／＼砂　なす／＼砂　なす／＼」

しかし、その声は、林の中にむなしく響き、鳥がびつくりするだけだつた。そして、とうとうその子供は死んで、雷鳥に生まれ変わった。それからいつも同じような声を出して鳴いた。

「砂　なす／＼　なす　砂」と。

母親はいくら待つても子供が帰つて来ないので、悲しんで泣いていた。義理の父が子供を殺したにちがいないと思つた。母親は彼の顔を指差しながら「子供が家に帰つて来なかつたら、役人に訴えますよ」と言つた。

しかたがないので、彼は子供を尋ねて林に行つた。あちらこちらを捜しまわつたが、子供を見付けることはできなかつた。

突然、林の中から鳥の鳴き声が聞こえた。「なす　砂」彼は恐怖を感じた。それは確かに子供の靈魂がのろつているかのように聞こえた。じつとして聞くのがこわかつた。急いで走つて行つた。しかし「砂　なす」の鳴き声はどこまで走つて逃げて後からついて来

た。彼は林から林へと走り続けた。突然彼は石につまづいた。

二、三日後、きこりが、死体を発見した。

## うそ鳴き声の鳥の話

ある所に二人の僧がいた。名前を能忍と不能忍と言った。能忍と不能忍は、若い頃から頭をそつて仏門に入つていた。二人とも辺境のお寺で長い間修業した。ある日、急に、能忍は仏様から成道をいただいた。

不能忍は、その事情を考えていた。自分と能忍の修業を比較しても、同じではないかと思つた。どうして能忍は早く願いを達したのか。不能忍は悲しかつた。不能忍は仏様に色色なことをお願いした。

真実の心を持つていることと、苦行の修業を行なつたことを仏様に申し上げた。仏様は「あなたはとても精進して修業をしているので、はめてあげるけれども、あなたの本性は水牛と同一なので、簡単には悟りをひらけないのだよ、それでも、これからもつと一生懸命に修業をすれば、友達のように道が開けて来ますよ」と教えた。

不能忍は仏様から教えていただいたことを遵奉した。彼は高い山の木の下で座禪を組んだ。このまま三年間座るつもりでいた。どんなことがあつても立つまいと固く決心した。

その日以後、不能忍は木のように動  
かなかつた。ありや虫が体をはいまわ  
つても、一言もしゃべらなかつた。鳥  
が頭の上にふんを落としても、全く気  
にしなかつた。仏法の意義と教えのこ  
としか考えなかつた。

夏が二回めぐり、過ぎ去つた。最後  
の夏は三年間の修練の成果にあたるが  
ある日、どこからともなく、つがいの  
鳥が飛んで来て、頭の上に巣をつくつ  
た。鳥がなにをやつても黙つていた。  
鳥達はごみを取りに行つては、帰えつ  
てきた。そして、雌鳥は卵を生んだ。  
しばらくすると、卵がかえつた。

小鳥は毎日同じように鳴いた。



しかし不能忍は全く意に介ししようとしなかつた。

その時、不能忍には、あと十日で、満願成就の日がきていた。雌鳥は食べ物を取りに出て行つた。昼間は、すこしの食べ物も取ることができなかつた。夕方、池の上を飛んでいる時、蜘蛛が蓮華の花の上にいるのを見つけた。蜘蛛も鳥を見つけたので蓮華の花びらの中に隠れた。鳥は花の中の蜘蛛を必死で捜したが、影も形も見当たらなかつた。しばらくすると、太陽がだんだんと山の端に沈んでいつた。そのため、蓮華の花弁も閉まつた。鳥は花の中に閉じ込められ、どうやつても出ることができなかつた。

不能忍の頭の上では、雄鳥が雌鳥を待っていた。小鳥は、おなががすいたので一晩中鳴いていた。

翌朝、蓮華の花が咲くと、雌鳥はやつと出られて、とんで帰つた。雌雄の鳥はけんかを始めた。雌鳥が浮気をしたのではないかと雄鳥はののしつた。

雌鳥がどんなに事情を説明しても、雄鳥はののしり続けた。朝の間中ずっと雌雄の鳥はののしり合つた。不能忍は大変困つた。ひな鳥は、おなががすいたので大きな声で鳴いた。不能忍は、耳が悪くなるのではないかと思つた。不能忍はうるさくてたまらず、巢を取つて、地の上に投げ捨てた。そして、「馬鹿者ノ そんなにうるさいと、老僧の耳は悪くな

つてしまふじゃないか。」と言った。

こういうわけで、いくら修業しても不能忍は悟りをひらけなかった。しかし、修業することについて落胆してはいなかった。仏様の前で自分自身反省することを誓った。

彼は強く流れる川のところに来て。そして小舟のこぎ手になることを志願した。

お金はもらわなかった。百人のお客さんを運んだらやめるつもりであった。

不能忍は一生懸命に働いた。川岸にお客さんがいなくても、自分の仕事に忠実だった。

こうして二年間が過ぎた。二年の間に九十八人のお客さんを無事に運んだ。

ある秋の頃、ひどい雨が降って、川の水が一杯になつて流れた。その時、ある主婦と子供を渡さなければならなくなつた。彼女は官吏の奥さんのように見えた。

「お前さん、がんばつてこぎ進みなさいよ！ 雨が降っているからぬれないようにしなさいよ。ぬれたら、お前を打ちますよ！」とおどした。

不能忍は「なまいきな女だ。」と、腹を立てたが、顔には出さなかった。「あなた達二人は、なにもこわがることはない。がんばつてこぎ進みます。」と言った。

そして彼は全力をふりしぼるようにして、親子を向こう岸にこぎ渡した。女客は、川岸

におりる直前に突然大きな声で言った。

「あ、たいへんだ。私は忘れ物をしてしまった。荷物を一つ、川の向こうに置いてきてしまった。あなた取りに行つて下さいませんか。」と言つた。

不能忍はへとへとに疲れてしまつて、答える力もなかつた。雨が降っているのに、もう一度川の向こうに渡つた。夕方、やつとその荷物を彼女に渡した。しかし、荷物の中を見て、その主婦はもう一度言つた。

「まあ、どうしよう、忘れてしまった。子供の靴を寢床の下に置いてきたんだけれども、どうかそれを取りに行つて下さい。」

その話を終りまで聞かずに、不能忍は主婦の顔を指さして、

「馬鹿者ノ、早く出て行けノ、おれはお前のために生まれて来たんじゃないぞノ、お前の下男じゃないぞノ」と大声でどなりつけた。

その主婦は観音菩薩の化身であつた。弟子にむずかしいことを教えようと、主婦の姿になつていたのであつた。まだ本来の忍耐ができない不能忍のために本当の姿となつて出現した観音様は、

「あなたは眞実の能忍ではない。あなたの修業とはどういふ修業のことですか。あなたはうその鳴き鳥に似ているのだ。一と言つた。」

不能忍は大変恥ずかしく思つて深く反省した。しかしながら、観音菩薩は不能忍を鳥の姿に変えてしまつた。その鳥の名前を、うそ鳴き鳥と呼んだ。

その鳥は晩夏の頃から初秋にかけて現われた。ちようど観世音菩薩が不能忍を鳥に変えた季節と一致している。

## 蛙の話

あるところに真修の若い和尚がいた。自分のすべての私欲を捨て、禪宗の空の真理を会得しようと決心して修行した。王様は和尚のことを聞いて、大変尊敬した。宮殿へ招いて、国師の職をおくった。そして、南の宮殿の方に大きな寺を建て、和尚に住職になるよう勧めた。しかし、和尚は恵んでもらうことを好まなかつた。和尚は自由に何でも見たり、景色のよい所を歩いたりして、きれいなお寺へ行きたいと思つていた。

ある日、一人で北の方にあるお寺へ尋ねて行つた。このお寺の住職は和尚の友達であつたが、しばらく会つていなかった。

観世音菩薩は、ずっと昔から、和尚の有名な修業の話をいたるところで聞いていた。今回、和尚が友達を訪問する機会に、試してみようと思つた。確かに真修だつたら観音様は和尚を仏様にしたと思つていた。

和尚が広い川を渡る時、観世音菩薩はきれいな少女に化身した。少女は和尚の方へ船をこいでいった。その時、川には誰もいなかった。人も船も付近には全然見あたらなかつた。

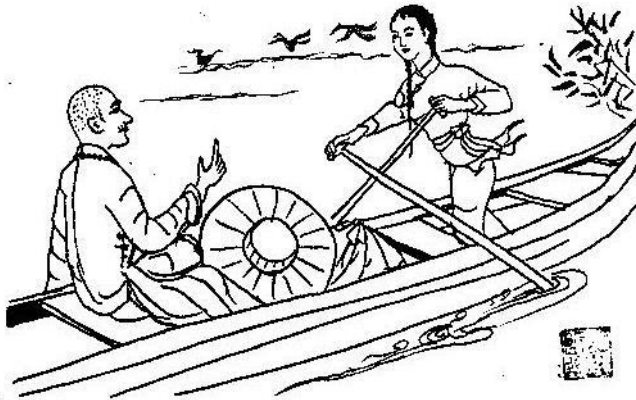
和尚が、船に乗り込むと、少女は川の真ん中あたりまでこぎ出した。そして小さな丘についた。

「なぜ真つすぐ行かないのだ。」と和尚は不思議に思つて聞いた。

少女はその質問を待つていたかのやうに、こぐ手をとめて、愛情に満ちた喜びを顔に浮べながら、和尚の座つてゐるところへ来て、「お坊さんとはとても美男子なので、ここで、お坊さんの情愛に浴したいのです。」と答えた。

「阿彌陀仏ノ、世俗の人ノ、私から離れて欲しい。」と和尚は厳しい顔で言った。

しかし、少女はどうしても離れたく



なかつたので、更に情欲を燃やしながら和尚に近付いた。和尚は黙っていた。荷物の中から金剛經をとり出して読んだ。和尚の声がだんだん大きくなっても、少女はにこにこしながら色々なことを言った。とうとう少女は手をお経の上に置いた。

「阿彌陀仏！ 私の体中には皇帝の命文があります。私の体を犯したら、その罪で殺される。」と首を横に向けながら厳しい調子で言った。

和尚の言葉を、少女はこわがらなかつた。

「私は死にたいのです！ あなたが、少しでも、愛して下さったなら私は死んでもいい。」と言った。

少女が何を言っても、和尚の心は石のように固かつた。それで少女は外の方法を試みた。着ている物を全部脱いで、胸まで見せたところ、和尚は目をとじた。和尚は荷物の中から衣服を出し、少女の体に着せた。

狭い船の中で、和尚は数珠を手にしてお経を読んだ。少女は「あなた！ ちょっとでいいから愛して下さい！ あなた！ 外を見て下さい！ 誰もいないでしょう。」と言った。

観世音菩薩は、和尚を何度も誘惑しようとしたが、すべてが失敗に終わった。が、とても感心した。

仏様の弟子として、和尚の行動は、涅槃に入る資格があるということなのである。

しかしながら、試験は確かな試みでなければ用をなさないのである。九回目まで試みたが、和尚は誘いに乗つてこなかった。きれいな少女の呼吸を顔に感じて、和尚の顔色は少しも變つていかなかった。しかし、十回目の試みで、きれいな少女はどうとう勝つた。少女はびつくりした。和尚の心が固いと思つたけれど、ついに和尚は自分を抑えることができなくなつた。

和尚の手は、少女の体に触れていた。その一分間の間違いが、二十年間の修業を全く価値のないものにしてしまつた。

觀世音菩薩はその時、残念に思つた。欲望を断ち切ることが、まだまだできないので、觀音様は和尚を大變憎んだ。そのために、和尚は昔の身分もすべて捨てなければならなくなつてしまつた。その上、觀世音菩薩は和尚の首をとつてごみのように川の中に投げ捨てた。その罪のため、仏様になれなかつたというだけでなく、「蛙」という下等動物に變えられてしまつた。

蛙は、首を切られると、両手で合掌するが、あれは「やめて下さい。」ということなのであつた。

## かぶとがにの話

あるところに貧乏な漁師の夫婦がいた。夫は、ある日、友達といつしよに遠い海に漁に出たが、突風におそわれ舟もろとも帰らぬ人となつてしまつた。

その知らせを聞いて、村の人々は大変悲しんだ。家々から泣き声が聞こえてきた。特に、夫を亡くした妻は悲しみ堪えられず、氣違ひのようになつて捜しに出た。家を出る時、夫はきつと生きているという確信をもつていた。妻は大きな山に着いた。高い山を登つたので大変疲れ、転び落ち木の下でその格好で寝こんでしまつた。

その時、突然大きな音が聞こえ、妻ははつと目が覚めた。彼女の前には一人の老人が立つていた。その老人は「あなたは誰なのだ。おれの家の前で寝てはいけないよ。」と言つた。

彼女は泣きながら「私は夫を捜しに参りました。おじい様教えて下さい。私の夫はどこにいるのでしょうか。知つていたらどうぞ教えて下さい。私は悲しくて死にそうです。」と頼んだ。すると、老人は、「私は木の神です。こんなに悲しんでいるあなたを見るとかわ

いそうに思います。しかし、あなたの夫は元気ですよ。遠い海の、ある島に夫は生きていますよ。」と言って、彼女に一つの宝物を渡した。そして「この宝を口の中に入れますと海の上を飛ぶことができます。しかし、これだけは忘れてはいけませんよ。宝を口の中に入れていた間は、目と口は絶対に開いてはいけません。それを忘れると大変なことになりますよ。」と教えた。

老人はそれだけ言って、姿を消した。彼女は宝を口の中に入れて目を閉じてみた。突然、風が吹いてきて、自分の体が軽くなっていくのを感じた。耳に



は何も聞こえなかった。

しばらく飛んでいくと、足が地面に着いた。目をあけて見ると海上の島に立っていた。その時、風もやんだ。そして夫が目の前の砂の上に坐っていた。彼女は夢かとばかり喜んだ。

夫婦は、今までの心配や悲しかったことを話しながら帰ることにした。

夫は妻を抱きしめて、海上を飛んでいった。妻の心は幸せに満ちていた。彼女は嬉しさのあまり木の神の教えた戒めを忘れてしまった。口の中に宝をいれているのを忘れて、夫の質問に答えようとしたのであった。突然宝は口からとび出した。妻は「あれえー」と叫んだが、二人とも海底深く沈んでしまった。

それから二人はかぶとがになつた。今でも、かぶとがにはいつも夫婦が一緒にいて、夫のかぶとがには妻のかぶとがを抱きしめている。その様子は、空を飛んだ時の状態そのままだと言われている。

現在、「かぶとがにのように愛する。」ということわざがある。これはこの話からきたものだといわれている。

## お正月の旗ざおの話

大昔、いつから始まったかわからないが、鬼が人間の土地全部を奪ったことがあった。それで仕方なく、人間は鬼の土地を借りて生活を営んでいた。鬼は人間にとって、もつとも悪いものとして存在していた。鬼は、人間の税を毎年値上げし、倍にすることもあった。それで、人間は特別の税を鬼に払わなければならなかった。人間がお米を作っていたので、鬼自身は「頂芽を食べ、茎を食べず。」と布告した。人間は反対したが、鬼は弾圧した。人間は鬼に服従しなければならなかった。そのため、その年のお米は全部鬼にもって行かれ、残ったものはわらだけだった。飢えのため、人間はやせてしまった。鬼は反対にせいたくなく暮しをして遊んでいた。人間は死に直面して神を待ただけになっていた。

西方の仏様は、人間の様子を見て、とても心配した。仏様は人間を助ける方法を授けた。仏様は、人間にこれからは「お米は植えないで、さつまいもを植えなさい。」と教えた。人間は仏様の教えを早速実行した。何もしらない鬼は去年の収穫期と同じようにしようと思つて、再び「頂芽を食べ、茎を食べず。」という布告を出した。

その結果、鬼はひどい目にあうことになった。人間はよく太ったさつまいもを選びながら、その収穫を喜んだ。しかしながら、鬼の家にはさつまいもの葉だけしかなかった。葉は、食べられるものではないということを知ったけれども、条例で決まっているので、鬼は何一つ文句を言えなかった。

次の収穫期が近くなつた時、鬼は新条例を出した。それは「茎を食べ、頂芽を食べず。」というのであつた。仏様は人間に「お米を植えなさい。」と教えた。その結果、鬼はお米を食べられなかつた。おいしそなお米は人間の家に運ばれ、鬼はわらを持ち帰つた。

鬼はまたまた人間を憎んだ。そして、今度こそはと良い方法を考えた。

「茎も食べ頂芽も食べる。」と布告した。

それから、鬼は「お前たち、何を植えてもどうやつても我々の手から逃げられないぞ！」と言つた。

しかし、仏様は今度も人間と相談して、新しい種類の食べものを植えた。それはとうもろこしであつた。

その年も当然鬼は失敗した。人間は大変喜んでいた。人間は希望をもつて毎日よく働くようになった。家にはお米も、とうもろこしも、たくさん蓄えができた。

鬼は胸が張り裂けるぐらい憎んだ。そして、最後に鬼は人間に「お前たちに貸した土地を返せ。」と命令した。鬼は「何もできなくていい。ただ、お前たちに食べさせる食物がもつたいない。」と考えた。

仏様は「鬼と相談して、仏様の法服と大きさが同じぐらいの土地」を貸してもらいなさい」と教えた。それから、人間は竹を一本植えた。竹の上に仏様の法服をかけ、その影が大きくなつても、その占める場所が人間の住むところだと鬼に約束させようとした。初め鬼は賛成しなかつたが、後からよく考えて「そんな小さな土地を貸して、利息がたくさんもらえるならばいいじゃないか。」と賛成した。

鬼は「ええ、法服と同じ大きさの土地だつたらなんでもないわ」と答えて、約束した。法服の影以外はすべて鬼の土地である。人間の土地はわずかに法服の影の広さだけだ、と心の中ではばかりしきつていた。

仏様は、人間が植えた竹の上に立つて、自分の法服を放ち、丸い形にかぶせた。そして、仏様は、その竹をどんどん高く成長させた。竹は天をつくほど伸びた。突然、天地は真つ暗になつた。仏様の法服はだんだん地球全体をも包みはじめた。

仏様がなされたことは、鬼に想像もできないことだつた。法服の影が鬼の土地を包むに

つれて、鬼はだんだん退いた。最後に、土地が完全になくなつてしまつたので、鬼は東の海の方へ走つていつた。

それから、東の鬼と呼ばれるようになった。

鬼は、自分の土地が人間のものになつてしまつたことを残念がつた。鬼は、兵隊を訓練して、人間に取られた土地を奪いかえそうと準備した。

人間と鬼が戦つた。鬼の兵隊はあとからあとから続いてくるので人間は一生懸命戦つた。鬼の兵隊は、鬼だけではなく、他の動物も一緒になつて戦つた。象もいるし虎もいるし毒へびもたくさんいた。仏様は人間を助けた。鬼の兵隊は前進することができなかつた。

どうやつても戦いに負けるので、鬼は仏様が何をこわがるかということとを調べようとした。仏様は「私は野菜と果物と、にぎりめしとたまごが大変こわい。」と鬼に言つた。逆に仏様も鬼のこわいものを調べた。鬼が一番恐れているものは「犬の血、にんにく、水(1)、つくい」であつた。

ふたたび、鬼と人間の戦いになつた。鬼の兵隊は、野菜と果物をたくさん手に持ち、人間にまき散らした。仏様は「果物を拾つて食料にし、犬の血ですべてのものを洗いなさい。」と教えた。

鬼は犬の血を見て、大変こわくなり、海の方へ退いた。

二回目に鬼の兵隊は、野菜とバナナをもつて来て仏様に向かつてまき散らした。仏様は人間に教えた。「バナナと野菜を拾い、にんにくを鬼の方へまきなさい。」と言った。鬼は、においがいやなので走つて逃げた。

三回目に鬼は、にぎりめしと卵を持つて来て、人間の方へまき散らした。すると人間は、それらを拾い、水しつুকいを鬼の方へまいた。鬼はこれはたまらないと走つて逃げのびようとしたけれども、逃げきれなかった。

鬼が一団となつて、東の海へ落ちのびる格好はたいへんあわれだった。鬼は仏様の前に平伏して、

「一年に二、三日でもいいから、我々の先祖のお墓参りをする事だけは許して下さい。」と頼んだ。

仏様は鬼を見て、かわいそうに思い許した。そのため、毎年、お正月になると、鬼は人間の土地に入つて来て先祖のお墓参りをした。古くからの習慣として、人間は旗ざおを立て、鬼が権力の濫用をしないようにした。旗ざおの上の飾物を鳴らすのは、鬼を遠ざけるためだった。旗ざおの上にも、木の葉と小さい枝がついていた。以来、人間は鋭い矢の

形を書いて、その矢の先を東の方へ向け、矢のまるい方には、水しつくいをつけた。お正月には鬼を禁じるための詩があつた。

旗さおに木々の枝葉を

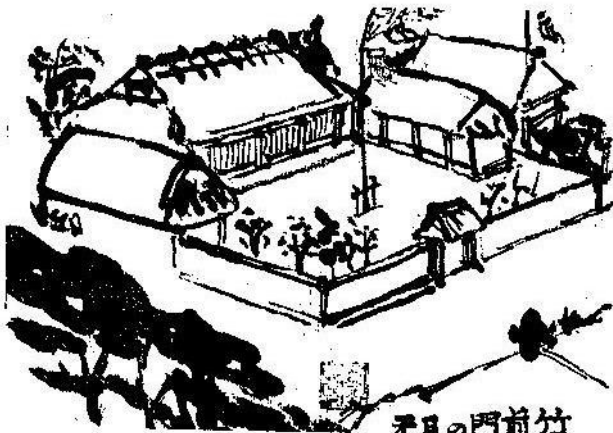
くくりつけ

鬼のいやがる水しつくいを

撒いたぞ

撒いた

門毎に



元旦の門前竹

才二部

地名の起源



## 石が夫を待っていた

昔、ある貧乏な夫婦が、二人の子供と住んでいた。上は男の子で十一才、妹は六才であった。毎日毎日、夫婦は仕事で外に出るので、妹はいつも兄について遊んでいた。ある日、仕事に出かける前に、母親は二人の子供に一本のさとうきびを与えた。そして「兄ちゃんは、さとうきびを妹にも分けてあげなさいね。そしてこれを食べたら二人で一緒に外へ遊びに行つていらつしやいね。兄ちゃんは、妹を泣かさなないようにしなさいよ。妹を泣かすと、父ちゃんが帰つたら叱られるよ。」と言つた。

ふたりは石でおもちゃの家を作つて遊んだり、歌を歌つたりした。遊んでから一緒に家に帰つて来た。ナイフを捜して、さとうきびを切ろうとした。そしてナイフを手にとると、突然柄が抜けて、ナイフは、妹の頭にとんでいつて突きささつてしまった。妹は氣を失つて倒れた。血がたくさん出た。

その様子を見て兄は大変こわくなつた。母親が言つたことを思い出して、「私はとんでもないことをしてしまつた。お父さんが帰つたら、どんなに叱られることだらう。」と考

えると、もうじつとして居られなくなつてしまつた。それで、兄は妹をそこに置きざりにして、一人で逃げ出した。

彼は家を出て、数日間逃げ続けた。逃げる途中で、色々なところに泊つた。月日がたつのが、わからないほど夢中になつて逃げた。十五年間も逃げ続けたが、まだ安住の地を見つけることはできなかった。どこのだれから御飯を食べさせてもらつたのかも、わからないだらう。

最後に、ある漁師の家の養子になつた。そしてとあみで漁をして生計をたてた。彼は青年になつて、ある女性と結婚した。彼女は網を織るのが大変上手であつた。

妻はいつも夫の船が持ち帰つた魚を市場に運んでいつて売つた。

二年たつと、子供が生まれた。夫婦とも大変喜んだ。

ある日、海が荒れていたのので、夫は仕事をやめ、網を直すことにした。昼御飯が終つてから、妻は髪の毛をかしながら、夫を見つめていた。かわい子子供は、夫婦の目の前まではつて来て、ひとりで砂遊びをしていた。夫が妻の顔をよく見ると、右側に傷跡があつた。夫はびっくりした。妻は、今まで誰にも見られないように隠していたのだつた。夫は、妻が傷跡を秘密にしているらしいと思つた。夫が妻にその傷跡はどうしたのかと尋ねると、

二十年前のある日、私は小さくてよく覚えていないが、自分の兄がさとうきびを切っている時、切りそこなつて、ナイフが頭にとんで来た。血がいつぱい出て私は氣を失つてしまった。そして、後でわかつたのですが、その時、近所の人々が助けてくれたのです。両親が帰つてくるまでに、お医者さんも来て、手当をしてくれました。私はまだ元氣だったので、両親の顔も見ることができました。しかし、私の兄は、父に叱られるのがこわいために、逃げて、どこかへ行つてしまいました。私の両親は、あらゆる手段を尽くして兄を捜しましたが、兄のゆくえを知ることができませんでした。それから、両親は、息子のことを思つて悲しい日々を送りながら亡くなりました。私には、だれも親切にしてくれず、人はありませんでした。食べ物、他人から盗んで食べました。そして私は漁師の家に売られました。私の泊まるところは決まっています。今日はここ、明日はあそこ、というような生活を送りながら、とうとう最後にあなたと一緒にになりました。」と言つた。妻の後ろに坐っている夫は、本当の妹が、自分の妻になつたということを知つて、びつくりした。夫は胸のいたみに堪えきれなく、居ても立つてもいられないような氣持になつた。妻から話を聞いてやつとすべてのことがのみこめた。しかし、夫は、この秘密は心の中にとどめておいて、自分だけが知つておくことと思つた。

一二三日たち、風がおさまっても、夫は心静かに生活することができなくなつた。

いつものように、夫は網を持って魚を取りに行つた。しかし、今回はなかなか帰つてこなかつた。

妻が家でいくら待つても、夫は帰らなかつた。よその夫は夜になると、みんな家にもどるのに、自分の夫だけは帰つてこないのです、妻は不思議に思つた。夫はとても勤勉な人であり、妻と子供をととても愛していた。それなのに、どうして帰らないだろうか、理由がわからないので、毎晩妻は子供をおんぶしながら、石の上に立つて、海のかな



たをじつと見つめていた。

三か月たち、六か月たち、そして九か月たつても夫は帰つて来なかつた。妻は、涙が  
れるほど泣いたが、石の上で待ち続けた。

その人影を農民たちはいつも見ていた。月日がたつうちに親子とも石に変わつてい  
た。その石は今でも、まだ、<sup>(1)</sup>ピイン・デインに残っている。人々はそれを石が夫を待ってい  
たと呼んだ。

(1) ピイン・デイン省は現在ベトナムの中部にある。

## 五大山の話

昔、ある老人が静かな砂丘に住んでいた。近所の人々は、このおじいさんが、どこから来たのかぜんぜん知らなかった。

ある日、遠い海のかなたに波動がおきた。突然、空が暗くなった。しばらくすると、大きな龍が陸地に向って進んで来た。

その龍は、砂丘の上を身をもがくようにして進んだので、そこにえんえんとした長い道ができた。ほこりがたくさん飛んで、おじいさんの小さな家は、ガラガラと音がして、こわれそうになった。おじいさんは、大きな鳴き声を聞いた。その時、龍はおなかから大きな卵を産んだ。その卵は、おじいさんの家のそばにあつた。龍は卵を産むと海へ帰って行った。

しばらくすると、海から大きな金がめがやって来た。金がめは、地を掘って龍の卵を埋めた。

「私は金がめの神です。この卵は、龍王のものですから保護して欲しいのです。」とお

じいさんの目前に来て言った。

「私には力がないので保護することができません。」とおじいさんは答えた。

金がめの神は、おじいさんに一つのつめを渡しながら、

「これを受け取って下さい。めんどろなことが起こつたら、急いでこのつめに聞いて下さい。すぐに助けに来て上げますよ。何も心配しないで下さい。」と言った。

おじいさんは「はい！ がんばります。」と答えた。

ある日、向こうの方から馬車がやって来た。馬車には悪人づらの兵隊達が乗っていた。

おじいさんは大変心配した。というのは、馬車は、卵の方へ向かって進んで来たからである。おじいさんは急いで金がめのつめを耳にあてた。すると、

「横になって下さい！ 横になって下さい！」と小さな声が聞こえてきた。おじいさんが言われたとおりに横になると、その爪は大きな虎の姿に変わった。兵隊たちはそれを見ると、こわくなったので、もとの道を我先きにと逃げていった。

その事件があつてから、おじいさんは自分の家を卵の上に移した。しかしながら、卵はどんどん大きくなった。最初は砂がどんどん高く盛り上がり、一日、二日とますます大きくなり、卵がとうとう地面を破って出てきた。おじいさんは人に見つかるのを心配してあ

わてて、砂を運んでは卵の上にかけた。しかし、おじいさんの力では砂をかけきれなかった。おじいさんの家も卵と一緒に持ち上げられてしまった。

卵が、だんだん大きくなるにつれて、もうおじいさんの力では、どうすることもできなくなつた。しかし、卵を何とかして保護しようと一生懸命に努力した。おじいさんは木の枝をかぶせてみたがどうにもならなかつた。卵はますます大きくなつた。高さだけではなくて、横にも大きくなつていつた。卵のからは、青、白、緑色が交じり合つて金のように光つていた。

ある日、おじいさんの家に、どろぼうが火をつけ燃やしてしまつた。おじいさんは金ぐみのつめをお願いした。突然、卵に穴があいた。中には寝るところもあつた。おじいさんは横になつてぐつすり眠つた。

すると卵からかわいい女の子が出てきて、おじいさんの寝ているそばに立つた。女の子はどんどん大きくなつた。毎日、いろいろな動物が女の子に果物を差し上げた。女の子

鳥は、木綿を持つて来て、おじいさんに着物を織つて差し上げた。

X X X X X X X

おじいさんは目をさまし、その少女を見て驚いた。そのお嬢さんは、大きい声で、

「十五年間、私はいつもお父さんの呼吸を聞いていました。今、お父さんが起きたので私はとても喜んでいきます。」と言った。

おじいさんは自分の目を疑がった。卵は大きな山になつていた。草がいつばい生えていた。鳥をはじめ、すべての動物がやつて来て楽しく暮らしていた。かめのつめは、おじいさんの枕もとにまだあつた。おじいさんは、つめをとつて耳に近付けて聞いた。道を教えてくれたので、穴を出る方法がわかった。

これから、おじいさんの責任はいっそう重くなつた。龍王の子供を育成

五行山



するのを、おじいさんは当然のことのように思っていた。動物たちはいつもおじいさんとお嬢さんのまわりを集まった。子供たちともいつしよによく遊んだ。

ある日、兵隊がどこからともなくやって来た。兵隊達の顔色は赤かった。兵隊達は、剣を持って、山の回りの人々を捕えて連れ去ろうとした。

兵隊達は、はじめにおじいさんと若者達を捕えようと思った。しかし、金がめが、兵隊達をおしつぶしたので全部死んだ。

その地に、山と人間が突然出現したので、農民達は天下つて来たと思つた。

彼らは、おじいさんとお嬢さんを天人と思ひ、薬をもらいたいと思つて頼み込んだ。

お嬢さんはそばのきれいな石を取つて回りにまき散らした。

すると、地面から五角の花が生え出た。その花は熱病を直すのにききめがあつた。農民はその花の名を「四季」と呼んだ。そのことが有名になつて、だんだん広まつていった。

お嬢さんのことは誰も知らない人はいなかつた。

やがて、王様は人々からきれいな少女のことを聞いた。

「皇太子とそのきれいなお嬢さんとを結婚させたいから連れて来なさい。」と家来に命じた。

家来たちは、探しにきて、石の上に坐っているきれいな少女とおじいさんを見つけた。家来たちは前に進み出て、贈り物と王様の国書を差し上げた。おじいさんがどうしたらよいだらうかと心配していると、突然海から金がめがめが出て、

「龍王は少女と皇太子が結婚することに賛成した。」と言った。

その後、山で天人の影を見ることがはなかつた。少女はおじいさんと別れ、馬に乗って、宮殿に向かった。おじいさんは、つめを金がめに返し、そのかめの背に乗って、どこともなく速くへ行つてしまつた。

今日でも、その山はまだ残つている。それは、クアン・ナアン省で一番きれいな山であり、世間の人々は五大山と呼んでいる。五大山の西側にワイン・デインという川があつた。ワイン・デイン川はダナンの港へ流れている。その川は龍王の皇后が卵を産むため作つたのであつたと伝えられている。

(注) 五大山は金、木、水、火、土の山々。

(1) クアン・ナアン省はダナンの東側にあります。

## 劍の池の話

ある時、明（みん）が武力でベトナムを治めようとした。明の軍隊は、ベトナムの国民をごみのように思っていた。悪い政策を行なったので、ベトナム民族は大変彼らを憎んだ。ラン・ソンというところの、少人数の義軍たちは立ち上つて、明国に反抗した。初めての軍隊で経験が少なく失敗した。その様子を見た龍王は、義軍たちに神劍を貸して上げようと考えた。

ラアン・ホアという土地で、漁業をやっているレ・ツアンという男がいた。

ある晩、ツアン氏は、いつもと同じように投網を水中に投げ広げたところであつた。網を引き揚げようとした時、突然重く感じた。大きな魚がかつたと思つた。しかし、網の中に手を入れたツアンの手は冷たいものに触わつた。というのは、手にさわつたのは魚ではなく細長い金属であつたからである。ツアン氏は、それを出して、捨て去り、また別のところに網をまいた。

二回目、網を揚げようとした時にも、ツアン氏は再び重く感じた。ツアン氏は、びつく

りした。先ほどの金属がまた網に入つて来たのだ。ツアン氏は、又川に投げ捨てた。しかし、三回目も、同じように網にかかつて来た。不思議なこともあるものだと思つて、灯りの近くで見るなり、突然大きな声で叫んだ。

「けけ／＼ 剣／＼」

それから、ツアン氏は、その剣をもつてラン・ソンで義軍の集団に参加した。彼は勇敢に戦つたので、敵から大変恐れられた。

ある日、レ・ロイ將軍が、ツアン氏の家にやつて来た時、暗い家の中で突然その剣が明るく輝いた。めずらしいことだと思つた。レ・ロイ將軍がそれを手にとつて見ると、剣には、ツアン・テンという字が書いてあつた。しかし、ほかの人々は、その剣を珍しいものとは思わなかつた。

ある時、レ・ロイ將軍は、戦いに敗れて林の中に逃げこんだ。その時、將軍は大きな木の上で明るく輝いているものを見つけた。

さつそく木に上り、それを見て、びっくりした。剣の柄であつた。いつか見たツアン氏の家の剣を思い出しながら、それを腰にさした。

数日がたつて、負けいくさで落ち延びた大勢の友人と会つた。その中に、レ・ツアン氏

もいた。ツアンの剣を、拾った柄にはめてみると、ちようどびつたりとおさまった。レ・ロイ將軍がそのことを話すと、友達はみんな喜んだ。レ・ツアンは、その剣を高く捧げてレ・ロイ將軍に、

「神様が、將軍に大事なことをやらせるために遣わされたものにちがいない。我々は、祖国のために国民のために、明の軍隊と最後まで戦おう。死ぬまで戦いぬこう。」と言った。

それからというもの、義軍の意気は高揚した。レ・ロイ將軍の手中で輝く剣は、敵軍に對した時には常に勝利に導いた。明の軍勢は剣をとともこわがったので、兵隊たちは、勝ちいくさにめぐまれた。食糧も十分あつたし、戦えば必ず勝つので自信に溢れていた。

神劍のおかげで、明の軍隊は、どこの戦場においても退却せざるを得なかつた。

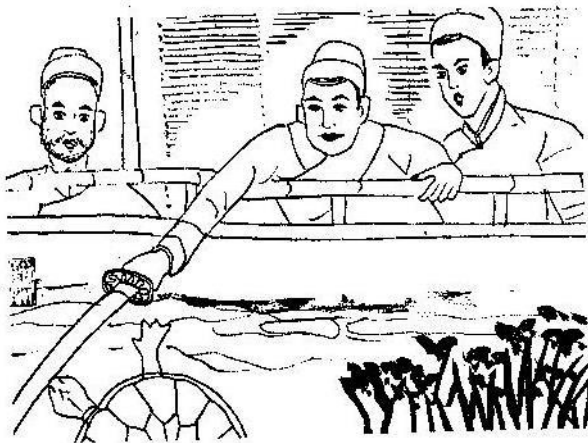
明の乱から一年たち、レ・ロイ將軍は一人で、タ・ウオン池で船に乗つて遊んでいた。その時、龍王は家来たちに、「神劍をとりに行つてくるように。」と命じた。船がだんだん沖に出た時、突然金がめが出現した。頭を上げ、体をあらわにして水面を泳いでいた。金船はゆつくり進んでいた。レ・ロイ將軍は、腰にかけた剣がちよつと動くのを感じた。金船は人間をこわがらなかつた。金船はすつかり体を現わして、レ・ロイ將軍の船の方

へ進んで来た。金がめは水の上に立ちながら、

「將軍！ 神劍を龍王に返して下さい。」と言った。それを聞いて、將軍はすべてが理解できたので、すぐうなづいた。腰にさしてある劍をとってわたした。金がめはそれを口の中に入れて、持つて行つた。金がめと神劍は、水中深くもぐつても、いつまでも明るく輝いていた。

レ・ロイ將軍は家来たちに、

「敵軍に勝つために、龍王様は、我々に神劍を貸してくださつたのだ。」と言つた。今、我々の国が平和になつたので、龍王は金がめを取りによこさ



れた。

その後、その池は、金の池とか金の剣とか呼ばれるようになった。

## 一夜の池と自然の砂丘の話

三代目の雄王には、たいへん美しい姫がいた。伝説では、皇太妃は生まれた時、天人から美しい容姿を授かり、そのため姫も大変きれいになったといふことである。

そのため、父王は彼女に仙容という名前をつけた。雄王は姫を目の中に入れても痛くないといふほど可愛がり、何か欲しいものがあるとすぐ与えた。

仙容姫は、あちらこちらのきれいな風景を見に行きたいと思つていた。それで、王様は、仙容姫にすばらしい船と家来と多くの宝物を差し上げた。仙容姫の船は、毎年、春の終わりがころ出発し、秋の終わりがころまでずっと帰つて来なかつた。しかし、楽しいことがあると晩秋になつても帰らなかつた。そんな時には、父王は大変心配した。姫が十八才になつたとき、近くの国の皇太子との結婚話が持ち上がった。でも姫はそんな話にちつとも乗気ではなかつた。

「親愛なる父王、私はまだまだ結婚なんかしたくないんです。」と宴会の席で言つた。そのころ、チウ・サで漁業を営んでいるチュウ・ヴオンという人と息子がいた。息子の

名前はチウであつた。貧乏はしていたけれども、一家は砂丘の上の小さな家で、毎日楽しい生活をしていた。

ある日、父と子が一緒に外へ出ていた時、突然家が火事になり、すべての財産が灰になつてしまつた。着る物は下帯一つしか残つていなかった。それで、一つの下帯を二人交代で身に付けるようにした。だから父親が下帯を付けると、息子は裸なので外へ出ることができなくなつた。父親が外へ出ない時には、息子は下帯を付けて、外へ出ることができた。チウ親子は、だんだん生活が苦しくなつた。チュウ・ヴオンは年を取つても、着る物がないので、病氣になつてしまつた。その病氣は、だんだん重くなつた。以前は、どうか、ほうようにして、つりに行くことができたが、今ではそれもだめになつた。ある日、自分の命が、もはやこれまでと知つて、父は、息子をそばに呼んで、

「下帯は一つしかないの、お前が身に付けなさい、私の体は、裸で地下に埋めてもいいんだよ。」と言つた。

しかし、チウは、父親をとて深く愛していたので、父親を裸のまま葬るのは、かわいそうだと思つた。「これから、たびたびつりに行き、魚と下帯を交換してもらおう。」と考へた。チウは、今ある下帯で、父親の死体を頭から足の先まで巻いて、夜中にそれを

丘へ持つて行き埋葬した。

それからのチウは、着る物はなにも持つていなかった。裸のチウは、夜だけ仕事をした。太陽が昇るころまでは川でつりをした。朝日が出る前に、水中を歩き、商人のところへ行つて魚とお米を交換した。それから家へ帰つて御飯を食べ、夕方までずっと寝ていた。晩ご飯を食べると、またつりに出かけた。孤独な生活を始めてから、もう二年が過ぎた。魚がたくさんとれる日、あまりとれない日、さらにはまったく何もとれない日もあった。新しい下帯と交換するには、魚の量が足りなかつた。そのためチウは、いつまでも裸でいなければならなかつた。

ある日、チウが、魚とお米を交換していると、突然、人々でにぎやかになつた。なんだろうと思つていると、人々は「姫の御船がここへ来る！」と言つて、喜んでゐた。姫の船がだんだん近づいて大きく見えてきた。それからしばらくたつと、姫を先頭にして家来たちが、にぎやかに歩いてきた。人々は家からとびだして見物した。チウは、帰途の道が混雑したので困つた。彼は裸の自分が恥ずかしいので、暗いところへ入つて行つた。そして砂を掘つてその中に入り、皆から見られないようにした。

姫は「暑いから冷たい水を浴びたい。」と言つたので、家来たちは砂でお風呂のような

形を作った。

偶然にも、お風呂を作ったところは、ちょうど、チウが砂の中に隠れているところであった。彼は、体の上で何が起こったのかわからなかった。しばらくすると、水の音が聞こえた。体がぬれてきた。それでもまだ、彼は姫が水浴びをしているのだということをまったく知らなかった。水が体をしたしてしまった。もう隠れることができないと思ったので、チウは恥ずかしかつたが立ち上がった。

仙容姫は、びつくりした。彼を見ると自分と同じように裸なので、これは鬼だと思った。「助けて！」と叫ぼうと思ったが、その男の顔をよく見ると悪人ではなさそうなので、姫は安心して、

「あなたは誰ですか。どうして砂の中に入っていたのか、答えなさい。」と言った。

その男の答を聞いているうちに、姫は涙を流した。彼女が一番驚いたことは、父王の領地に、こんな貧乏な人がまだいるということであった。姫はこんなことがあるとは夢にも思っていなかった。彼の親孝行ぶりに感心した姫は、

「このチウ氏のような男こそ、全国の若者たちが見習わなければいけない。」と言った。それから、チウは体を洗って、きれいな衣服をもらって着た。

おふろから二人が出たのを見て、家来たちはびっくりした。

「この人は私の夫です」と姫は言った。

チウ氏は恥ずかしそうにしていたが、びっくりして、

「とんでもないことです。」と言った。しかし仙容姫は、

「私は今までに結婚したいと思つたことは一度もなかった。しかし今、あなたに会えたことは、お天とう様のおかげではないかと思つている。」と言つた。

多くの家来たちは仙容姫に賛成したが、反対する者も少しいた。姫は、父王が自分をしていへん愛しているので、父王の許可をもらわないで結婚しても、あとで、許してもらえらと思つた。それから、川の上で結婚式が始まつた。地方の年寄りの方々も大勢参列した。

X X X X X X X

しかし、父王は、姫が結婚することを聞いて、大変お怒りになつた。

「姫とチウの結婚は許可しない。ばか者、どうしておれに相談しなかつたのか。直ちに、官殿の戸を閉めなさい。彼女が官殿へもどつたら、殺してもよい。」と家来たちに言つた。

仙容姫の船が官殿へ帰ると、姫の妹がとび出して来た。聞いたことをすべて姫に申し上

げた。姫は心配した。

姫は、父王の性格をよく知っていた。父王は、愛したら深く愛し、きらいになると徹底的にきらいような人であった。新夫婦はいろいろ話しあつたが良い方法がなかつた。そこで、姫に仕えていた家来たちを集めて、

「父王は、私をもう愛してくださいださつてはいないのです。われわれはもう宮殿には帰れない。家来たちは自由にどこへ行つてもよろしい。」と言つた。

こうして、二人だけで新しい生活にはいつた。

夫妻は、外国の船と連絡をとり、物を交換した。生活はだんだん豊かになつていつた。

川の上はにぎやかな市場になつた。

チウは外国のお客さんと一緒に、他国へ出たいと思つていつた。

数日後、お客さんと二人で南の方へ出発し、海の中のある島の高い山に着いた。その山の名前はクワン・ヴイエンと言つた。お客さんは、船を止めて水を汲みに出かけた。チウは山の頂上まで歩いて行つた。すばらしい風景を見ながら歩いてみると、いつの間にか小さな家の前に立つていつた。家の前では道士が坐禪を組んでいた。チウは道士に質問しようとしたが、道士が先に、

「お前は どうして おそいのか。」と言った。

チウは、道士を普通の人間ではなく神様だと思つた。頭を下げて弟子にして下さるようお願いした。取り引きのお客さんが、チウのところに来て来ると、チウは彼にすべての財産を渡した。

「お客様遠慮しないで下さい。私はずっとここで修業して、成道するまで帰りません。」と言つた。

弟子になつたチウは道理を早く、深く理解することができた。

道士は、彼に色々な教理を教えた。

船が迎えに来ると、道士は彼に帽子と剣を差し上げた。そして、

「今日から、お前はどこへでも自由にいきます。この二つの物を身につけていなさい。すべての靈感がその中にあるのだ。」と言つた。

チウ氏は、船の中では一言も口をきかなかつた。

家に着くと、妻に仏教の道理を修めることができたと言つた。夫の学んだ道理については、妻は早くから理解していた。

ある日、夫婦は自分たちの全財産を貧乏な人に与えた。人々は、夫婦の生活がうまくい

つているのに、どうして外のところへ移ろうとしているのか不思議に思った。人々はどこへ行くのか知らなかった。

夫婦は日中はあてもなく歩き、夜になるとどこへでも泊まるというような生活をしながら、もつともつと道理を知りたいと修業した。

ある夕方、彼等はいへん疲れていたが、泊まるところがなかった。そこは、鳥の鳴き声も聞こえないほどさみしい場所であった。彼等は草原に寝た。チウは剣を土地にさし、帽子を顔にのせた。

その晩、突然、大きな音がした。先ほど彼等は草原に寝たのが、目をさましてみると、今はすばらしい夜具の上に寝ていた。衣服も変わっていた。

空中にきれいな宮殿が現われた。雲が建っているような廊下へ出た時、夫婦はびつくりした。こんな大きな建物と、きれいな風景を見たことがなかった。

宮殿には長い城があった。宮殿の中はどこへ行っても家来たちが大勢いた。仙容姫は侍女に質問した。

「ここはどここの国ですか。」

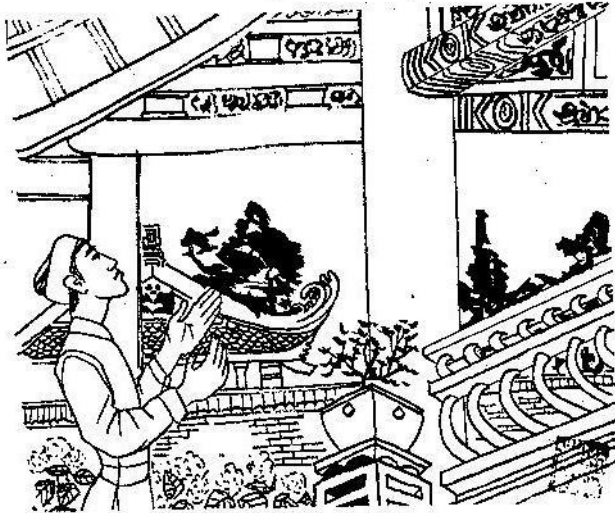
侍女は「ここは姫の国です。姫の願っていたことが実ったのです。」と答えた。

夫婦が正殿堂に入ると、一人の代官が進み出た。

「このすべての物を、両殿下に差し上げます。」と一冊の本を差し出しながら言った。

本を見ると、すべての物、代官、家来、財産等は両殿下の所有物であるという事が書いてあった。

「それでは、これからわれわれはこの官殿の主になるのか。」と夫は妻に言った。その時から二人は楽しい生活を送れるようになった。人々は両殿下がお説教をなさるといふことを聞いたすると、そのためのきれいな宮殿が、一夜で出来あがつた。それは珍しいこ



とであつた。人々は殿下に差し上げる贈り物を持って拜謁した。

両殿下のことがだんだんと知れ渡り、遂に父王のところにも伝わつた。

父王の家来たちは、両殿下の情報を持ち帰つて、

「姫夫婦は、軍隊も軍備も軍楽隊もたくさん持っています。そして、姫夫婦に仕えている人も、大勢います。」と申し上げた。

最後に家来たちは「姫夫婦は、父王の領土を二つに分ける計画をしていますよ。」と思し上げた。

雄王は長い間、姫のことを忘れていたが、その報告を聞いて顔を赤くして怒つた。父王はそれに対抗するため、家来たちに命じて、兵隊の訓練をさせ、戦いの準備をした。

父王は兵隊たちが出征する時、

「彼らは昔から敵である。私の娘ではない。お前たちのうち誰でもいいから、首を持ち帰つた者には高い身分を与えよう。」と言つた。

父王が、戦いの準備をしていることを聞いた仙容姫の代官たちは、対戦するための計画を練つた。

ある一人の將軍は、姫夫婦の前で、

「姫陛下がお望みなら、われわれは敵軍と徹底的に戦います。」と誓った。

仙容姫は父王とはどんなことがあつても戦いたくなかつたので、將軍に、

「私には戦うことはできない。父王の命令に反対することはできない。」と言つた。

その日の夕方、父王の兵隊が向こうの川岸まで来ているのが見えたが、姫の兵隊は戦わなかつた。兵隊たちがいくら心配しても、仙容姫は平氣な顔をしていた。

夜中に情報が届いた。父王の兵隊たちが、宮殿まで橋を渡すことに成功した。夫婦は起きあがつた。二人はお天とうさまに祈つた。すると突然ひどい台風が吹いて来た。風がひどいので、宮殿が持ち上がるように感じた。

その翌日、父王の兵隊たちと、その地方の人々は、不思議なことを見てびっくりした。風がやんでよくみると、姫の宮殿も何もかも、どこかへ飛んでいつてしまつていたのである。その跡は、池のようになり、水をいっぱいに湛えていた。人々はその池を一夜池と呼んだ。そして、宮殿のあつた場所を自然の丘と呼んだ。人々は、宮殿のあつた土地にチウのお宮を建てた。

## 海の池の話

昔、南海という村で、仏様の供養会が開かれた。大勢の人々がそれを見に行つた。そしてみんな、念仏を唱えながら魚、鳥などを放生し、すべてのものの幸福を祈願した。

ある日、その供養会に年寄りのこじきばあさんが姿を現わじた。おばあさんが、どこから来たのか誰も知らなかつた。

おばあさんの身なりは見るからにきたなく、着る物もろくになくて、ほとんど裸同然だつた。そして不潔な汗のにおいで大変くさかつた。こじきばあさんはどこへ行つても、

「みなさん、私はおなが空いて死にそうなんです。」と帽子を出しながらあわれに物乞いをするのであつた。

しかし、一日中歩いて何も貰えなかつた。どこへ行つても、人々はこじきばあさんを敬遠した。こじきばあさんが見えると、人々は走つて逃げた。

人々はお経を読んでいても、このおばあさんが来るといやな気持になつた。そして「南無阿彌陀仏」と唱えていても途中でやめ「どうしてお前は近づいてくるのか。」と、の

しつた。こじきばあさんは、ただ黙っているだけであつた。最後（つい）には、兵士がこじきばあさんを引つたてへ行つた。

供養会が終わつても、こじきばあさんは、村に住みついた。供養会の時と同じように、どこの家に行つても、人々はおばあさんをきらつて、冷たい言葉で追い返した。お金持ちの家では戸を閉め、犬をけしかけて追い払つた。

三さ路の真ん中の道を歩いている時、こじきばあさんは市場から帰つてくる親子と会つた。親子は、こじきばあさんを、とてもかわいそうだと思い、自分の家に連れて来て、余っているご飯



を食べさせた。おばあさんは喜んで家を出た。

その夜、親子が寝ていると、家の戸をたたくものがいた。戸をあけてみると、昼間のおばあさんがそこに立っていた。「一晩とめてください。」と哀願した。どこへ行つてもおばあさんを泊めてくれる家はなかったからだ。

「どうぞ。」と言つて、親子はおばあさんを迎え入れた。御飯を差し上げて、畳を一枚施した。そのうえ親子の夜具は、こじきおばあさんを腰掛けさせるために差し出した。

こじきばあさんは、腰を下ろすとすぐ寝てしまった。おばあさんのいびきは雷のように大きかった。親子ともびっくりして、夜具の方を見た。すると、そこに光りのようなものが見えた。このおばあさんは、実は、こじきではなくて、龍の現身であつた。頭は天井を突き抜け、足は地面まで長く延びていた。

母親はこわくなつて、一言もしゃべれなかつた。しかし、その翌朝には龍はどこかに消え、あのこじきばあさんの姿しか見えなかつた。そしておばあさんは家を出る前に、

「ほかの人々は、仏をあがめようとはしない。彼らは仏様を尊敬しようとはしない。罪はもつともつと深くなるでしょう。この家の親子だけが良い人間です。このもちがえ(石灰)<sup>(1)</sup>をさしあげます。今日中にすべての家のところにまきなさい。どこへも行かないで、

しかし、行きたければ行つても良いですが、山の頂上へ行つていらつしゃい！」と言つた。親は心配しながら質問した。

「ほかの人々も助けたいのですが、どのようにしたらいいのですか。」

こじきばあさんは、浚々ポケットから米粒を取り出し、口の中に入れ親子にはもみがらを渡しながら言つた。

「この二つのお米の皮をあなたがた親子に差し上げよう。善行ができますよ！」

こじきばあさんは、そう言つて、ふつと、どこかへ姿を消してしまつた。親子の前にはだれもいなくなつた。さつそくおばあさんが教えてくれたことを実行した。近所の人々にもその話をした。しかし、それを聞いても人々は冗談だと思つて、だれも本気にしなかつた。

その夜、にぎやかな供養会の最中に、突然水が地下から湧き出した。その水は、信徒のところへも流れて来た。そしてだんだん量がふえて土地が見えなくなつた。誰にも原因がわからないので、みんな、びつくりした。そのうちに、池のように水がいつぱいたまつてきた。人々は急いで逃げたいと思つたけれども、どこへも行けなかつた。水かさがますますふえ、人間も動物も浮き上がるようになった。しばらくすると大きな音が聞こえ、石も家も人間もみんな沈んでしまつた。

水がますますふえている時、大きな龍が現われて南海の村を包んだ。だが親子の家だけは、水の上になんたん高く持ち上げられた。

その情景を見て、親子とも心から感謝した。もみがらを水面に置くと、突然二つの大きな船になった。水かさが高くなっても、雨が降っても、風が吹いても、親子は助かった。

沈んだ土地は、いま、海の池と呼ばれ、親子の住んでいたところは小さい島になっている。

(1)もらがええというのは石灰と同種のもののことをいう。

## ロイ城の話

昔、チャンバの王様が<sup>1)</sup>大越(ヴェトナムの古名)の皇女との結婚を望んでいた。王様は人々からフェエン・トラン皇女は大変美しいと聞いていた。王様の侍女たちと比べると、鳥と魚のように違っていた。美人が欲しいという夢を、王様はいつまでも待っていた。チャンバの王様は結婚の贈り物として象牙、金、珍馬などを大越の王様に差し上げようと考えた。しかし、それらだけでは、まだまだ足りないと思われた。一人の代官が王様の耳に小さい声で言った。

「陛下が美人を欲しいと思われるのでしたら、一番良い方法として土地をさいて差し上げたらどうでしょうか。」

最初、王様は賛成しなかったが、しばらく考えて、オ州とリ州という二つの州を贈り物として分割して上げようとした。二人の代官たちが「やらないで下さい。」と言つても、王様はまったく聞こうとしなかった。

「すべての山河はおれのものだ。しかし、大越の皇女と結婚ができなかつたら自分は非

常に悲しい。その上、二つの国は今までに血をたくさん流してきた。今日の、この機会は兩國の親善にもなることだ。」と王様は言った。

この結婚は、大越の朝廷の誰もが賛成した。陳（トラン）陛下と玄珍皇女は、特に喜んだ。結婚の申し込みが受け入れられたので、チャンバの王様は代官に命じた。

「良い日を選びなさい！ 家来たち五百人ぐらいで、皇女を迎えに行きなさい！」

結婚式の行列は、官殿を出て、危険な道、むずかしい川を渡りながらチャンバの官殿に着いた。王様はたいへん喜んだ。玄珍皇女が欲する物は、すべて差し上げた。代官たちも家来たちも、結婚を祝福した。

大越の代官は、チャンバの国へ、新しい土地をもらいに来た。

X X X X X X X

しかし、人間の生活は、いつまでも同じようによく行くものではなかった。それから色々と複雑な問題が生じてきた。

皇女とチャンバの王様が結婚してからまだ一年とたっていないのに、王様は病気のために亡くなった。悲しい知らせは国中に流れた。特に玄珍皇女にとっては、その知らせは耳のそばで雷を聞くようなものだった。王様がなくなつたので皇女は若くして未亡人になつ

た。悲しみにくれながら葬式の日を待つていた。その国には、皇女も王様と一緒に火葬されるという法律があつた。皇女はベトナム人であり、その風俗に服従したくなかつたが『郷に入れば郷に従え。』ということとで、その習慣に応じなければならなくなつた。皇女の父皇は、その報告を聞いて心配した。

「皇女を助けるために、チャンバの国へ早く行きなさい。」と代官に命じた。

大越の代官は、チャンバの国にやつて来た。人々は、王様の死で忙しくしていた。代官は、そのすきに乗じて皇



女を宮殿から連れ出した。そして皇女を船に乗せ、まっすぐ北に向かつて走つていった。

チャンバの人々は玄珍皇女がなぜ宮殿を出て行つたのかと、その理由を知らなかつたので、みんなびつくりした。だんだん憎むようにさえた。皇女が出ていつたので、昔の約束は何の価値もなくなつた。結婚の贈り物として大越に差し上げた土地は、皇女がいなくなつたので、チャンバの国へ返さなければならなくなつた。

そう考えて、チャンバの新王は、五万の兵士に武装させて、戦いに向かつた。



大越の朝廷では、どう攻めてくるかわからないので、正しい情報を得るため、ドアン・ヌ・ハイ將軍に千人の兵士をつけて、確かめに行かせた。

夏の午後、大越の軍隊が北方から進んで来た。チャンバの指揮官にロイという人がいた。情勢がきびしくなったので大越の將軍は大変心配した。というのは、敵軍の方が多勢であつたからである。それで大越の將軍は、兵士を少しづつ分けて待機させた。

軍隊のいるところは、どこも旗と木がいっぱい立っていた。夜になると、鐘をつく銅の音もうるさく聞こえた。何の小ぜりあいもなく、ただにらみ合いが続いた。

二、三日後、ドアン將軍はチャンバの將軍と話し合つた。

そして、両方の將軍で誓いを立てた。

「一晩だけ戦つてみよう。それから両軍に分かれて大きな城を築こう。早く完成した方が勝利国になり、負けた方は、兵隊をひき上げなければならぬ。」という意味の文書に調印した。

大越の軍隊は、何の準備もしなかつたが、チャンバの兵士は、急いで土地をならし、城の半分ぐらいを建てた。ロイ將軍は兵士たちに「全力をあげてかかれ。」と命じた。朝になつて、チャンバの兵士たちは、自分達の城が大越の城より高く見えるので大喜びをした。

しかし、銅羅の音が鳴り響いた時、チャンバの兵士たちは大越軍の方を見てびつくりした。いつ大越の兵士たちが城を建てたのか、チャンバの兵士にはわからなかった。大越城の方が何十メートルか高く見えた。城の門も大きく見えた。大きな城だけではなく城の中にも立派な家がたくさん建っていた。

屋根は赤く、壁は白く、城の下には象や馬がたくさん見えた。兵士たちが旗の下に並んでいるところもよく見えた。

チャンバのロイ將軍は、高い山からその様子を見て、びつくりすると同時にこわくなってきた。

ロイ將軍は、大越の兵士たちは一夜でこの城を建てる力があると考えた。戦いの銅の音が鳴ると、チャンバの兵士たちは、自分の領土へ逃げて行つた。

X X X X X X X

大越は、多くの兵士も費用もかけないで、戦いに勝つことができた。陳王にそのすべての事情を申し上げた。

「どういうふうにして勝利に導いたのか。」と王様は質問した。

大越の將軍と兵士たちは、その城と立派な建物をほとんど紙で作っていたのであった。

敵軍の方では、それを本当の城と思ったので恐れて自分の領土へ逃げ帰った。そして王様に「兵士も象も馬も紙で作りました。」と申し上げた。

現在でも、チャンパの未完成の城を見ることが出来る。そこはユエという古都で、そこに城が残っている。

その城を人々はロイと呼んでいる。敗戦將軍の名前を記念するために、その名で呼んでいるのである。

(1) 大越(タイ・ヴィエト)は昔のベトナムの国名である。

## あとがき

戦争は人間のすべての愛情、母子愛、民族愛、祖国愛を奪ってしまふ。二十五年間以上も戦争はまだ続いている。ベトナム人民の骨は山のように積み重なり、血が川のように流れてしまった。我々の民族の苦しみはいつまで終わることなく続くのか、停戦になつても本当の平和はまだ遠い。

民族、風俗、習慣、言葉も同じなのに国は二つに分れ、そのために夫は北の方に妻は南にと別々に暮している夫婦もいる。燃やし続けた二十五年間の戦いの結果は「ベトナムの人間の皮と骨」を残し、ベトナム人の悲劇以外のなものでもなかつた。

私は、その民族のいたみの中で、その苦しみの時代に生れて来た。私が初めて産声をあげた時は、ちょうどフランスからの独立戦争が戦われていた。爆弾の炸裂する音の中で、私は生まれた。

物心ついた時、戦争をもう知っていた。苦しみは絶えず私から離れなかつた。未来はどうなるのか……。その不安は、今でも私の胸をしめつける。

私の民族の苦しみはいくら数えても数えきれない。昔は中国に千年隷属した。十九世紀後半ころから二十世紀前半まで八十年間、フランスに土地を奪われ、植民地になった。そして今までは毎年、毎月、毎日、毎時間、私の国では砲弾の音が聞こえ、まだやまないのである。

民族、祖国の再建の時代に生きる私は、無意識的な生活や無自覚な生き方をしたくない。と同時に、私は少しでも外国の人々と交流し、理解しあいたいと思つてゐる。そんな理由のため私は、編集者阮懂芝（グエン・ドン・チ）氏の『ベトナム民話』を訳し、『第一集ベトナム民話』として紹介することにした。この本は私が初めて訳した本なので不備な点もあると思われるがその点をご教示いただきたい。

この小さな本ができるにあたり、協力して下さつた多くの方に感謝を込めてお礼を申し上げます。特に私が御世話になつてゐる本立寺御住職及川真介上人には、この本の上梓にあたり、かずかずの御配慮をたまわつた。

また、帝京大学国文学科助教岡田啓助先生にもいろいろ御指導たまわつた事を感謝したい。そもそも、私がこうしてベトナムの民話を皆さんに紹介できるのは、先生が「書いてみては。」と言つて下さつたことが動機であつた。文法、用法も先生になおしていただ

いた。

更に、忘れてはならない方に、私の日本語の恩師の杉田はつよ先生がおられる。

日本語を一言も話せなかった私が、こうしてベトナムの民話を訳して出版できるようになつたのは、全て先生のおかげだと言つても過言ではなく、この御恩はいつまでも忘れることがないであらう。

又、私が通う大学の友達である山田幸雄君と内村勝博君も私が訳した文章を見て、まじがいを直してくれた。感謝したい。

その他、おおぜいの方に御助言、御指導していただいた事を、心から感謝してお礼を申し上げます。

最後に、本書を八年前ベトナム戦争のため亡くなつた母親の靈に捧げ筆を擱く。

東京都八王子市上野町七 本立寺内

作成 一九七五年一月十五日

訳者

LE · CUONG

法名 釈 如 典

訳者の経歴

本名 レ・クオン

法名 釈如典 (チツクニヨイデイエ)

一九四九年 中ベトナムクアンナン省に生れる。

八才 同省 福林寺にて得度式を受く

一九七二年 来日

現在 帝京大学・文学部・教育学科在学中

『ベトナムの民話』第一集

昭和五十年九月一日印刷・発行

編集者 グエン・ドン・チ

訳者 レ・クオン（チツク・ニヨ！・デイエン）

挿画 チアン・チン・ホア ルオン・テイ・バク

発行者 及川 真介

発行所 東京都八王子市上野町七番地 本立寺内

印刷 同

上野町十七番地 さくら印刷社  
電話〇四二六（二二）四四五四



